
孤独な俺と無邪気な君と

大空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な俺と無邪気な君と

【Nコード】

N2726X

【作者名】

大空

【あらすじ】

ありふれた日常に退屈し、いつも一人でいた俺が転校生の長塚有希と出会い関わっていくことで少しずつでも確実に成長していく学園ラブコメディ。

プロローグ（前書き）

皆様始めました。大空と言います。この作品は私の処女作になります。どうか生暖かい目で読んでいただけると嬉しい限りです。

プロローグ

黒板に字を書いている教師の背中を見ながら俺は思う。
何故こんなことをしているのだろうか。

いつものように朝起きて、学校に行き、授業を受け、家に帰る。

そんな当たり前の毎日を何度も繰り返す。

いつか学校を卒業し適当な仕事に就き生きるために働く。

特に夢も目標も無い俺はきっと将来そういう風になるだろう。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り授業が終わる。

これで今日の授業はすべて終わった。

あとは帰るだけ。

俺は急いで帰る支度を始める。

担任が教室に来て帰りのHRを始めた。

俺はすべての言葉を聞き流し、クラスの委員長が号令をすると同時に俺は教室を出る。

俺こと宮野和也は平凡な高校二年生だ。俺が通っている光坂高校は家から最寄りの駅で一駅乗り継いだところにある。光坂高校は偏差値が高いわけでも低いわけでもない普通の高校だ。何故俺がこの高校に受験をしたかという点、単に確実に入れると思ったからだ。俺の成績は大体中の上ぐらいで中三の時の担任にも問題ないと言われた。

電車に乗り次の駅に到着するまでの間、俺はカバンから本を取り出した。本と言っても読んでいるのはライトノベルだが。自分で言うのもなんだが俺はオタクである。そこまでひどくはないがアニメなどをよく知らない奴からすれば俺は立派なオタクと言われるだろう。電車を降りて家まで歩きながらも俺は上を向いた。

俺はこんな日常が嫌いなわけではない。親に捨てられたとか、親が死んだとかがあるわけでもない。親は共働きで家にいないことも多いが特に不満はない。俺はきつと十分に幸せなのだろう。

だけど俺はこんな日常がつまらない。

いつそのこと空から美少女降ってくるとか、異世界に送り込まれるとかそんなことが起きないだろうか。

そんなことを考えても現実はそう甘くない。いくら空を見上げていたところで女の子は降ってこないし、異世界に送り込まれることもないだろう。もし仮に空から女の子が降ってきたとしよう。その女の子はそのまま地面にぶつかり見るも無残なことになるし、異世界だって本当にあるとは思えない。

いつの間にか歩かず突っ立てることに気が付いた俺は再び歩き始めようとしたところで、ふと誰に見られている気がした。

俺もついに頭がおかしくなったかな。

なんてことを思いつつあたりを見回していると遠くにいる一人の女の子と目があつた気がした。

女の子すぐに目をそらしどこかに歩いて行った。

何だったんだ？

考えてもよくわからないから俺は

「まあ、いつか」

と考えるのをやめて家に帰ることにした。

プロローグ（後書き）

皆様どうだったでしょうか？まだ始まったばかりなので何とも言えないとは思いますが、この続きも読んでくださると嬉しいです。応援よろしくお願いします。

感想やアドバイスなどもお待ちしております。

第一話 「つまんねーの…」

翌日、朝のHRで

「実は今日うちのクラスに転校生が来ています」

と言う担任の言葉にうちのクラス二年二組はものすごい盛り上がりを見せていた。

「先生！男子ですか？女子ですか？」

「どんな子ですか？」

「早く教室に呼んでください」

はつきり言つてもものすごくうるさい。

もう少し落ち着けないものだろうか？

とか思うものの正直なところ俺もその転校生がどんな奴なのか気になつていた。

「静かにしないと転校生が入つてこれないだろう！」

とクラスのまとめ役である佐藤何とかが周りを注意した。

下の名前は知らないがうちのクラスに佐藤は一人だけなので特に問題はないだろう。

一番最初に騒ぎ出したのはお前だけだな…

佐藤は何かあるたびに騒ぎ出し、周りを煽つて最終的に自分でその場をおさめる。

「そういうお前だつて騒いでたじゃんかー」

こいつは確か……だめだ思い出せない。

とりあえず山田（仮）としておこう。

山田（仮）は佐藤とよくつるんでいる奴…だった気がする。

山田（仮）のことは置いとくとして、俺もこいつのいうことには賛成だ。

お前が騒いだりしなきゃいいだろうに。

そう思うがおそらくそれは無理だろう。

佐藤とは一年の時も同じクラスだった。ちゃんと話したことはなか

ったがいつもこんな感じで目立っていたので何となく覚えている。一年の時佐藤はよく教師に「お前が静かにしていればいいのだが」とか「あまり周りを煽ったりするな」などと言われていたが、二年になってからはそういうのもなくなった。おそらく教師も諦めたのだろう。うるさくなり過ぎたらちゃんと言いつたところだろうか。たら悪い奴じゃないが、少し厄介な生徒と言ったところだろうか。「はいはい。今から転校生を教室に呼ぶから静かにしてね」担任がいうと同時にクラスが静かになる。最初から静かにしていればいいものを。

「じゃあ、教室に入ってきてー」

ガラッ

教室のドアが開きそこから入ってきたのは長くてきれいな黒髪をした女子。瞳はきれいなオッドアイ。なわけがなく普通に黒い瞳だった。身長は男からすれば低いほうでまあ女子の平均ぐらいだろう。はつきり言って可愛かった。二次元のキャラと比べれば普通な気がするが、クラスの女子の中では一番と言ってもいいかもしれない。まあ好みは人それぞれなので絶対にクラスで一番かどうかはわからないが。

「長塚有希ながつかゆきです。家庭の事情でこちらに来ました。これからよろしくお願いします」

長塚有希は人懐っこい笑顔でそう言った。

今の笑顔でクラスの男子の何人が長塚有希に惚れただろう？

チラッ

一瞬長塚と目があった。

たぶん教室全体を眺めでもしてたまたま俺と目があったのだろう。

まあ長塚は俺のことなんか気にもとめてないはずだ。

「じゃあ長塚さんはあそこの席に座ってね」
「はい！」

長塚の席は廊下側の一番後ろとなった。
ちなみ俺は前から三番目廊下から四番目だ。
ほとんど真ん中ではあるがしょうがない。

今は五月の下旬だからあと一か月ぐらいで席替えがあるだろう。
それまでの我慢だと自分に言い聞かす。

「HRはこれで終わりにするからあとは質問タイムね」
「おお！先生わかってる〜」

佐藤も転校生が来たことでテンションがものすごく高い。

「じゃあさっそく質問！どこから来たの？」
「趣味は？」

「前の学校ってどんな感じのところ？」
さすがは転校生人気者だな。

クラスのほとんどの奴らが長塚の席集まっている。
俺は自分の席からその様子を眺めている。

俺以外にも席から動かずに長塚のほうを見ている奴らはいる。

そういう奴らはおそらくそこまで転校生に興味がないか、自分もその輪に入るのが恥かしいのか。

その辺のことはそいつら本人に聞かなきゃわからないが
まあ別に特にすごい理由があるわけではないだろう。

ちなみに俺はただ聞きに行くのが面倒なだけだ。
俺だって転校生がどんな奴かは気になる。

でも何か月かしたら普通にただのクラスメートになるわけでどんな奴なのかは見てればわかるはずだし、別に何か俺に影響を及ぼすわけでもない。

だから俺は質問攻めになってる長塚の観察をやめて、いつも通りカバンからラノベを取り出し一時間目の授業が始まるまでの暇つぶしを始めた。

キーンコーンカーンコーン

四時間目が終わり昼休み。

俺はすぐさま購買へ向かう。

購買で焼きそばパンとコロツケパンを買うと俺は急いで屋上に向かった。

本来屋上は生徒が勝手に入らないよう鍵がかかっており生徒は誰も屋上には入れないのだが、俺はちよつとした理由で屋上の鍵を持っている。

そのため昼休みはいつも一人で屋上に来て昼飯を食べる。

このことは俺以外の誰も知らない。

だから屋上はいつも俺の貸切というわけだ。

だが俺は昼休みにしか屋上に行かない。

休み時間や放課後は時々教師が屋上にやってくるのだ。

時々と言ってもそんな頻繁に来るわけではないのだが

放課後に一度そんなことがあり本気ではれるかと思った。

昼休みは教師も色々とやらなくてはいけないことがあるのか屋上に来ることは決してない。

だから俺はいつも昼休みは屋上で一人のんびりと昼飯を食っている。

昼飯を食った後は時間ぎりぎりまで屋上で過ごし五時間目が始まる一分前には教室に戻るようになっている。

ふと今日うちのクラスに転校してきた長塚有希のことを思い出す。

実は異世界から来たとか、超能力を隠し持っていたりしないかなあ。

なんて思ってみてもやはりそんなことあるはずもない。

「つまんねーの……」

思わずつぶやくがどうしたところで何も変わらない。

それを理解しているからこそ余計に嫌になる。

キンコーンカーンコーン

予鈴が鳴った。

そろそろ戻るか。

俺は一度伸びをしてから教室に戻った。

結局その日は特に何もなかった。

普段と同じとしか言えない。

転校初日だからというのもあり長塚の周りには結構な人が集まってはいたが、そのうち長塚にも仲のいい奴とかができて結局は普段通りになるはずだ。

翌日、今俺は凄く戸惑っている。

何故なら

「昨日は疲れたよ。みんなたくさん質問してくるから」

今俺の目の前には昨日は転校してきた長塚有希が笑顔で俺に話しかけてきている。

何故こうなった!?

と叫びたいくらいである。

ちなみにどうしてこんな状況になったのかというと

俺は基本早めに学校に来ている。
だからクラスではいつも一番に学校についている。
今日もそうだと思っていたのだが

ガラッ

「あ、おはよう！」

教室に長塚有希がいた

バンッ

思わず思いっきりドアを閉めてしまった。
てか長塚学校来るの早すぎじゃねえの！？
いや俺がいうのもなんだけどさ
早すぎじゃねえの！？
よしいったん落ち着こう。
俺みたいなのがいるんだからほかにこの時間に来る奴がいてもおか
しくはない。
まあてつきり俺が一番だと思ってたのにほかの奴がいたんだから驚
いたのはしょうがないと思う。
とにかく教室に入ろう

ガラッ

「おはよう！」

「お、おはよ」

クラスメートにあいさつすんのかって高校入ってこれが初めての気が

する。

いつもは教室に一番乗りしたらあとはずっとラノベ読んでたからなあ。

「ところでなんで今一回ドア閉めたの？」

「あ、ああ。まさかここ時間帯に誰かが来るとは思ってなかったから驚いて」

「あはは。そうだよー私もこんなに早く来るつもりじゃなかったんだけど…」

「なら何でこんなに早く？」

早く会話を終わらせたいのだからこれだけは聞いておきたかった。

「時間見間違えちゃって大急ぎで来たらこんな時間に」

長塚は「あはは」と恥かしそうに笑っている。

「そうなんだ。」

時間を見間違えたって……でもまあそれなら明日からはまたいつも通りか。

問題も解決したしさっさとラノベでも読むかな。

なんて思いながら自分の席に向かおうとすると

「君はいつもこんな時間に来てるの？」

話しかけてきやがった!?

「まあね……」

俺はそっけなく返した。

「そうなんだ。でも毎日こんなに早く来て何してるの?…あっ!もしかして部活とか?」

まだ話しかけてくるのか。

俺は話しかけられたらちゃんと話し返すことにしてるので

「俺は部活には入ってない。帰宅部」

「そっか。ならいつも何してるの?」

「…本読んでる」

ホントいつまで話しかけてくる気だ?

「昨日もずっと休み時間本読んでたよね?」

「なんで知ってんの？」

「休み時間のたびに読んでるんだもん。そりゃ気付くよ」

「それもそっか」

「それで、何読んでるの？」

「これ」

俺はカバンからラノベを取り出して一番最初のページを開いて見せる。

クラスメートにも何度が同じようなことを聞かれることがあった。

最初の頃は口で題名を言っていたのだが読んでいるのはラノベなので「え？何それ？」みたいな反応をされることが多かった。なので

最近が一番最初のページを見せることにしている。すると「へえ」

と微妙な反応をされることも多いが、俺は気にせずに題名を見せたらすぐ読書に戻るようになっている。中には「宮野もこういうの好

きなのか！？」と食いついてくる奴もいたが俺は「まあ」とか「それなりに」などそっけなく返して会話を終わらせてしまうので会話が

続かずそのままクラスメートが席に戻っていく。

「へえ君もライトノベルとか読むんだ」

「も？」

「うん。前の学校の友達の影響で私もそれなりに読むんだ。意外だった？」

「うんまあ」

正直驚いた女子でもオタクとかはいるけど長塚はそういうのまったく興味がないと思っていた。

「私がこういうの読んだら変かなあ？」

「別にいいんじゃないの。人の趣味とかは人それぞれだし」

「そっか、そうだね」

今度こそこれで会話は終わったな。

つてことでラノベでも読みますか。

「そっか、そうだね」

まだ何かあるのか……

しかも俺の前の席に俺の方を向いて座ってきやがった。

「名前教えてほしいんだけど。」

そういえば、俺まだこいつに名前教えてなかったな…

「宮野和也」

すると長塚は

「これからよろしくね！ 和也君！」

と笑顔で俺に言ってきた。

……てかいきなり名前かよ。

そんなこんなで三十分は長塚と話している。

「ねえ聞いている？」

「ん？ああ聞いている聞いてる」

学校の生徒は八時三十分には学校に着いて席に座らなければならぬ。
い。

そして俺はいつも七時三十分には学校に来ている。

つまり俺は一時間ほど早く学校に来ているのだ。

部活の朝練がある奴らはこの時間帯に学校に来ているがそれ以外の連中は普通はいない。

朝練のある奴らは当たり前だが部活の練習に出ているため教室にはいない。

つまり俺は三十分ほど前からずっと長塚と二人っきりで話をしていたわけだが、もうすぐその必要もなくなる。

八時になると何人かの生徒がちよくちよくとだが登校してくる。

別に長塚を嫌っているわけではないが、三十分も誰か、しかも女子と話すのはなんていうか色々と疲れる。

学校で俺は基本的に一人しているのでこつこつ長時間（と言っても三十分だが）話をするのに慣れていない。

中学校の時はそれなりに仲のいい奴が実はいたりはするがそいつは

男で女子とこれだけ話をするのは初めてだったりする。
とにかく今はこの二人っきりの状況をどうにかできればいい。
早く誰か来てくれ〜
という願いが叶ったのか

ガラッ

来たっ！！

「おはよう〜！」

「おはよう。長塚さん来るの早いんだね」

俺を救ってくれたのは吉田だったか吉野だったか…たぶん吉田だったと思う。

控えめな性格だが人当たりが良く友達も多い子だ。

「吉田さんだったよね？」

「うん。私の名前覚えてくれてたんだ？」

良かった…名前あつてた。

「昨日は色々ありがとう。助かつちゃた」

「ううん。私はそんなお礼を言われるようなことしてないよ」

どうやら二人は昨日の何やらあつたようすでそれなりに仲が良さそう
だ。

「あ、そうだ。昨日のことなんだけど…」

とそのまま長塚は席を立ちあがり、吉田の方に行ってそのまま今度
は吉田と話し始めた。

やっと解放された。

ありがとう吉田！

声に出さず心の中で感謝の言葉を吉田に送った。

もう今日は疲れた。

まだ授業すら受けてないのに俺はとてつもない疲労感を感じた。

もう今日みたいなことはこりこりだ。

第二話 「……ごめんちよっと病院行ってくる」

昨日の朝教室で長塚と遭遇した俺はHPを0寸前まで追い詰められたところ、吉田のおかげでその危機的状況を抜けることができた。その日は頭の中で吉田のことを神と崇めたりもした。

朝のことがあってその日の授業はとても体力を消費した。

この時点で俺は色々と限界に達している気がしなくてもないが、この日は朝のこと以外は何事もなく無事に過ごすことができたのでまあよしとしよう。

問題は今だ。

「おはよう!」

何故また長塚がこの時間帯に教室にいるんだ?

昨日は確か長塚が時間を見間違えたからこの時間に来ていたのとだとだ

「おはよ」

じゃあ何で今日もこの時間に長塚がいるんだ?

あれ?

これはつまりまた吉田様…じゃない吉田が来るまで話さなきゃいけないのか?

おかしいなわけがわからない。

あれ?あれれ?

やばいこのままだと自分を見失う気がする。

そうなると精神科に行くことになるな。

できたらそれは避けたい。

よし一旦落ち着こう一度深呼吸でもして

「ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」

「どうしたの和也君? いきなりラマーズ法なんかしだして?」

「……ごめんちよっと病院行ってくる」

精神科に行こう。

今ならまだ間に合っはず

「えっ？ 病院ってまさか…産婦人科？」

「ちげえよ！」

「違うの？」

「だから違っつて！ ってか何故に産婦人科！？」

「だっていきなりラマーズ法なんかするし」

「あ、ああ…」

そりゃそうか、いきなりラマーズ法なんかしだして病院に行くなんて言ったら…

「おかしいだろ！？ 俺男だから！ 子供なんて産めないから！」

「とか言いつつも実は和也君女の子だったり…」

「しないから！ 俺は真正銘男だから！」

何で俺朝っぱらからこんなこと叫んでるんだろっ…

「ふふ、あははははは！」

「ど、どうした？」

いきなり笑い出すもんだから驚いた。

いや長塚といると終始驚いてる気がする。

「いやだって、ふふ、あははははは！」

長塚は机を叩きながら大笑いしている。

やばい長塚が壊れた。

さすがに壊れた奴を見捨てる気にはならないので

「大丈夫か長塚？ 一緒に精神科行くか？」

「い、一緒につて和也君も？」

笑うのを我慢しているのか肩をぴくぴくさせながら「ふ、ふふ。」と笑いを漏らしている。

はつきり言っつてものすごく不気味だ。

「最初に俺病院行っつて言っただろ」

「あれっつて冗談じゃないの？」

「いや冗談抜きでだけど」

最初はおかしくなりつつあった俺が手遅れになる前にどうにかして

もらおうと思っていたのだが、今はこの壊れてしまった長塚を治してもらおうのが先だろう。

「も、もう無理。あははははは！」

長塚はもう修復不可能な気がする。

手遅れか…

それからしばらく経ってようやく長塚の笑いが収まった。

てかあんなに笑い続けるような奴初めて見たな。

「はあはあ、ふ〜」

「えつと大丈夫か？」

これがかきつけで長塚がおかしくなっていたりしないといいのだが

「うん。もう大丈夫」

良かった特に異常は見当たらない。

ただでさえ長塚と関わるととてつもなく体力を消費するのに壊れた長塚と関わったら自分が自分でいられるかわかったもんじゃない。

「和也君って面白いね」

「は？」

何で俺が面白いと言われなきゃいけないんだ？

「俺なんかした？」

「だっていきなりラマーズ法なんかしたり、俺は真正銘男だなんて言い出したり」

「それは長塚が俺のこと実は女とか言うからだろ」

「ラマーズ法については…まあ置いておこう」

「普段からそういう風にしてればいいのに」

「普段からって長塚はまだ転校してきて三日目だろう」

「そうだけど和也君っていつもあんな感じなんでしょう？」

あんな感じってどんな感じと言おうとも思ったが長塚の言いたいことは何となく分かるので、

「休み時間に一人でラノベ読んで何が悪い、話しかけられたらちゃんと話すようにしてるだろう」

「そうなんだけど。うーんとね」

長塚は何か言いたいようだがもうタイムアップだ。
もうすぐ奴が来る。

「えーと、だから和也君は…」

ガラッ

「おはよ〜」

やってきたのは吉田だ。

ナイスだ吉田！さすがは我らが神吉田様だ。

「あ、おはよう真理ちゃん。」

真理って誰だ？

吉田の名前か？

まあ別になんだったっていいや。

もう疲れた今日はもう時間が来るまで寝ることにしよう。

気が付けば昼休みだがはつきり言って今までの記憶がさっぱりない。
だが寝ていたというわけでもないらしい。

何故なら授業を受けた記憶はないのにノートはしっかりと取ってあるのだ。しかもこれは俺の字だ。

まあ特に気にすることではない。

どうせ授業中に語ることなど何もないとにかくさっさと昼飯を買いに行くかな。

なんてことを考えていると。

「宮野、ちよつとこの資料運ぶの手伝ってほしいんだが」

俺を呼んだのは国語教師の田中先生。

確か三十代の独身男。

俺が知っている情報はこれくらいだ。

ほかの教師のこともよくは知らない。

さらにここだけの話俺は担任の名前を知らない。

いつも担任のことを頭の中では担任と呼んでいるし、声に出して呼ぶときは先生と呼んでいるから名前を知る必要もない。

「宮野？お〜い宮野？」

うちの学校には教師の情報なんでも知っている生徒がいるという噂がある。

その噂には情報を使って教師を脅しているとか、教師だけでなく全校生徒の情報も持っているなど色々ある。

さらにはその情報を買っているなんて噂もあり一部では情報屋と呼ばれている。

この噂のどこまでが本当なのか知りたいところではあるがその情報屋を見つけることは無理だろうと俺は諦めている。

「宮野？み〜や〜の〜」

なんかうるさい奴がいるな

なんなんだまったく

「おい宮野、田中先生が呼んでるぞ。」

「え？ ああはい。なんですか？」

俺はクラスメイトに言われてようやく気が付いた。

少しボーっとしてたようだ。

「この資料を運ぶの手伝ってほしいんだが」

「はい。わかりました」

できることなら「やなことだ。この独身男！」とか言ってみたいがそんなことをしたところで怒られるのが落ちなので心の中で叫びながらも田中先生の手伝いをする。

それ以前に俺は国語係なのでこの教師の手伝いを断るわけにはいかない。

本当なら何の係りにもなりたくなかったが、何かしらの係りもしくは委員会はやらなくてはならないのでしょうがない。

「助かった。ありがとうな宮野」

資料を職員室に運び終えた俺はさっさと購買に行こうとしたのだが、

「あ、宮野君ちようどよかった」

俺の前に担任が現れた。

「このプリントを長塚さんに渡してほしいの。私今ちょっと手が離せなくて」

何でこう次から次へと

これじゃあ昼飯食う時間が無くなるんだが

「お願い渡しといてくれる？」

「はい。わかりました」

何故か断れない俺。

「じゃあお願いね」

そう言っただけで担任は去って行った。

あれ？ あの人のどこに行ったんだ？

今うちの担任が職員室の窓から出て行った気がするんだが気のせいだろうか？

でもまあ今はそんなことよりもさっさとこのプリントを長塚に渡しにいかないと本気で昼飯を食う時間が無くなる。

俺は教室に戻るや否やすぐに長塚を探したのだが、

「いない」

どうやら教室にはいないようだ。

しょうがないから学食の方にも行くか。

俺はそう思って学食にも行ったのだが、

「いない」

ほかにも購買や中庭などにも行ったのだが、

「いない」

ここは一旦教室に戻った方がいいかもしれない。

俺は教室に向かったのだがその途中

「あ、長塚」

長塚発見。

「ん？ 和也君どうかしたの？」

「このプリント渡すよう言われて」

俺は担任に渡されたプリントを長塚に手渡す。

「ありがとう。わざわざ私のこと探してくれたの？」

「そうだけど」

「教室で私の机の上にも置いといてくれればよかったのに」

「……………」

「？ 和也君？」

「……………」

「おい」

その手があった!?

うわ最悪俺ってバカだ。

何で気が付かなかった俺！

「和也君？」

「ああ、なんでもない」

すっごいテンション下がってきた。

元からテンション低い方だけど

めっちゃテンション下がってきた。

「もしかして…気が付かないですっと私のこと探してたの？」

「!?!?」

「ふん、そっか」

「な、なんだよ」

「べっつにー、ふふふ」

「言いたいことがあるならはっきりと…」

くう〜

「……………」

「和也君お昼食べてないの？」

すっかり忘れてた。

途中から「意地でも見つけてやる！」とか思ってた。昼飯のこと忘れてた。

「いいんだよ。昼飯食う前のちよつとした運動ってやつだから」

なんか色々無理矢理な言い訳な気がする

「でも……」

「だからいいんだって。今から食うから」

「そうじゃなくて時間……」

キーンコーンカーンコーン

「……もうないよ」

「今すぐ食べばまだ間に合う」

「でも和也君お昼ご飯は？」

よく考えてみたらまだ昼飯買ってもない。

「……………」

「ご、ごめんね私のせいで」

「別に長塚のせいではないだろ」

もとはと言えば担任……いや田中が悪いんだ！

そつだあの独身男が俺に資料なんか運ぶのを手伝わせたのが悪いんだ！

あいつに食べ物の恨みは恐ろしいんだってことを教えてやる。

「ふ、ふふ、ふふふふふ」

「か、和也君？ どうしたのなんか怖いよ？」

「大丈夫だ。悪いのは全て田中なんだから」

「田中？」

「そつ田中だ。あの独身国語教師だ」

「田中先生がどうかしたの？」

「いやなに、ちよつとあいつに仕返しをするだけさ」

「何する気？」

「まずはあいつの靴に画鋏を入れてやる。そのあとはさりげなく水やゴミをあいつに…ふふふふ」

「和也君！ 落ち着いてそんな地味な嫌がらせはやめようよ」

「地味？ ならもつと派手にするか」

「もつとだめだよ！？ ほらいつもの和也君に戻って」

「安心しろ。俺は普段通りだ。ちよつとテンションが高いだけで至つて普通だ」

「ほら元に戻つて。アンパンあげるから」

「アンパンだと…」

「…何で長塚アンパン持つてんの？」

「お昼に食べようと思つてただけど食べきれなくて」

「貰つていいの？」

「いいよ。はい」

助かったな田中今回は長塚のアンパンに免じて許してやる。

「ありがと。いくら？」

さすがにただで貰う気にはならない。

「お金はいいよ」

「でも…」

「いいつてば。私は先に教室に戻るから和也君も早くアンパン食べて教室に戻つて来なよ」

長塚は走つて行つてしまった。

長塚よ…廊下は走るな。

しかし長塚には借りができてしまった。

長塚はそんなこと気にしてはないだろうがそのうち何らかの形で借り返さないとなあ。

アンパンを食べながら長塚にどうやって借りを返すか悩んでいると、

「ん？」

画鋏が一つ転がっていた。

「……………」

…田中の靴に入れといてやるか。

第三話 「お前バカか？」

長塚が転校して来てから二週間ほどが経った。
長塚もクラスに馴染んで特にこれといって問題はない。
クラスの奴らも長塚を受け入れている様子だ。
そういう俺も長塚の存在に慣れつつある。

「おはよう！」

「おはよ」

今では朝での挨拶も普通にできる。

まあ挨拶なんてできない方がおかしいんだけど…

「今日も早いね」

「お前に言われたくねえよ」

こんな軽口も言えるぜ！

「ほらほら和也君、今日こそは私とお話ししよう」

「は？ 話したら毎朝してる気がするんだけど」

長塚の奴この歳でぼけたか。

「和也君いつもまあとか、うんとか、そうだねとか相槌ばかりじゃない」

「そんなこと…」

ないとも言い切れない自分がいる。

「だからたまには和也君から何か話題だしてよ」

「そんなこと言われてもな…」

俺は基本聞き手だし、何かを話すにしても何かしら話題がないと何を話せばいいかわからない。

だから自分から話題をだせと言われてもどうすればいいかわからない。

ホントに俺って…

「ほれほれ私に聞きたいこととかでもいいからさ」

「ん…」

聞きたいことか…そうだな。

「そういやずっと前から気になってたことがあるんだ」

「何々？ 何でも聞いて」

「すっかり聞くの忘れてたんだけどさ、何で長塚こんなに早く学校に来てるんだ？」

「え？ 聞きたいことってそれ？」

「そうだよ。確か最初は時間見間違えたんだよな？」

「そうだけど」

「それはいいんだよ。誰だってミスすることはある。でもそれから毎日この時間に来るのがわからん。ありえないとは思つが毎日時間を見間違えたりしてるのか？」

「だとしたら長塚は悪い意味ですごいと思う。」

「いくらなんでもそれはないよ」

「なら何でこんな時間に来るんだよ？」

「そんなの決まってるよ！」

「？」

「和也君とお話ししたいからに決まってるでしょ！」

「……………」

何言ってるんだこいつ

「その何言ってるんだこいつって言う目やめてくれない？」

「お前バカか？」

「む。失礼なこと言わないですよ。私それなりに成績いいんだよ」

「いやそういう意味じゃなくて」

「大体そんなにおかしなことかな？」

「おかしいにもほどがある。何で俺？ 吉田とかならまだわかるが」

「真理ちゃんとお話するのも好きだけど、和也君とお話するのも楽しいよ」

「本当によくわかんない奴だな。俺なんかと話して何が楽しいんだか」

「そうかな？ 和也君って面白いじゃん」

「俺からしたら長塚の方が断然面白いわ」
「そ、そうかな。なんか照れるな。えへへ」
「何で照れるんだよ！ 面白いつて言われて照れる奴初めて見たわ！ 大体褒めてすらないからな」
長塚と話すとホント疲れる。
「ほらほら他にも何か質問ないの？」
「ない」
俺が聞いたかったのはこれだけだからな。
「ええーもつと私になんか聞いてよ。なんでも答えるよ」
「ないもんはない」
「ちえー、いいもんなら私が和也君に質問するもん」
「俺に？」
また面倒なことになってきたな。
「そつちだけ質問しといて私の聞きたいことは無視なんてするいとほしくないよね」
こいつ最初からこれが目的か。
しょうがない。
「何が聞きたい？ 俺の答えられる範囲でなら答えてやるから」
「え？ ホントにいいの？」
なんなんだこいつ自分から聞いておいて。
「聞きたいことがないなら無理に聞くことはないだろ」
「待って待って少しだけ考えさせて」
「言っておくけど質問は一回だけな」
「何で？」
「俺はお前に一回しか質問してないんだから長塚も俺に聞けることは一回だ」
「和也君ずるい！」
「お前にだけは言われたくないわ！」
はあ早く吉田来てくれないかな。
「ならとりあえずとっておくよ」

「は？」

何を言ってるんだ長塚は？

「だから今は質問しない。そのうち質問するからその時に和也君、ちゃんと答えてね」

「やっぱりお前の方がずるいわー！」

今現在授業中。

科目は国語、教師は田中先生。

今思えば俺も地味に嫌なことをやってしまったと反省はしている。ついカツとなつてやってしまった。

だが後悔はしていない。

あの時俺がやったことは正しかったと少しばかり思っていたりする。

田中先生の靴に入れた画鋏がどうなったかは知らない。

てかもう興味ない。

今俺は反省の意味を込めて今回は少し真面目に授業を受けている。

「つまりこの作者の伝えたいことは」

今回は真面目にしているが次回からはいつも通りにしよう
はつきり言つて疲れるからな

「次にこの…」

キーンコーンカーンコーン

「っと今日はここまで」

ざまあ。チャイムに授業邪魔されてやんの。

「宮野あとでノートを集めて俺のところを持ってきてくれ」
罰が当たった。

というか何であとでなんだよ。

今でいいじゃん。

今ノート集めた方が絶対にいいじゃん！

「はい号令」

「起立、礼！」

嫌がらせか！嫌がらせなのか！？

やはり田中を許すわけにはいけないようだ。

「はあめんどくさ……」

ていうか重い！

このノートたち重い！

正直一人でこれを職員室まで持っていくのはきついかもしれん。

田中めこれをわかっていてわざと俺に。

俺の中でどんどん田中への恨みが膨れ上がっていく気がする。

「宮野君大丈夫？」

「え？ ああまあ」

俺に声をかけてきたのは吉田だった。

一時期俺の中で神として崇められていたことのある吉田様が一体俺に何の用だ？

てか用があるなら早くしてほしい腕がきつい。

「ノート運ぶの手伝いしましょうか？」

「は？」

いきなり手伝うとか言うもんだから驚いた。

でもよくよく考えてみると吉田は人が困っていたりするとよく声をかけたりすることが多いので今回もそんな感じだろう。

「いやいいよ。大丈夫問題ない」

「いいからノート半分貸してください」

吉田は俺からほとんど無理矢理な形でノートの半分を持ってくれた。

「ほら職員室に行きましょう」

「あ、ああ」

吉田の言つとおりさっさと行くことにしよう。

気まずい。

さつきからずっと無言だ。

こんなのとならやっぱ一人で運んだ方が気が楽だったと思う。

「あの…」

「何？」

吉田の方から俺に話しかけてきた。

「えっと、その…」

「？」

何か言おうとしたが何を話せばいいかわからない様子。

どうやら吉田もこの気まずい空気が嫌らしい。

「あ、そうだ。宮野君ってさ有希ちゃんと仲いいですよね」

「えっとさ、有希って誰？」

おそらくはクラスの誰かだろうが、残念ながら俺はクラスメートの苗字ならともかく名前はわからない。

「長塚有希ちゃんのこと。いつも朝二人で喋ってるじゃないですか どうやら有希とは長塚のことらしい。」

「朝は二人しかいないから喋ってるだけで別に仲がいいわけじゃないと思うよ」

「嘘。宮野君ってあんまりクラスの子と話したりしないじゃないですか。普段なら二人きりでも気にせず一人で本読んでるのに有希ちゃんとはよく話してるでしょ」

それは長塚が俺にかまってくるだけです。

そんなことを言ったところで吉田が信じるとも思えない。

「それに有希ちゃんと話しているとよく宮野君の名前が有希ちゃんの口から出てきますよ」

待て待て待てあいつは一体何を話してるんだ？

変なことを吹き込んだりしてなきやいいが

「和也君って本当は面白いんだよ。とかよく聞きます」
あいつはホントに何を…

「それに有希ちゃん転校してきたばかりなのに宮野君のこと名前で呼んでるじゃないですか」

「それなら吉田だって名前で呼ばれてるだろ」

「そりゃ私は女の子ですから、男子で名前呼ばれてるの宮野君だけだと思えます」

「どうだかな」

長塚って何考えてるかよくわからないんだよな。

「あ、着きましたよ」

ガラッ

「失礼します」

田中はどこだ？

「田中先生ノート持ってきました」

どうやら吉田が田中を見つけてくれたらしい。

「おう、宮野お疲れ。吉田は宮野の手伝いか？ 偉いな」

「いえ、私が勝手に手伝っただけですし」

「じゃあ先生失礼します」

さっさと教室に戻るかな。

「吉田手伝ってくれてありがとう」

教室に着いたので吉田にお礼を言っておく。

「どういたしまして」

「む、和也君。真理ちゃんにデレデレしてない？」

「デレデレって表現この場では使わんだろっお礼言っただけだし。てかいきなり現れるな。心臓に悪い」

ここで長塚の登場。

気配もなく表れたので少しばかり驚いた。

「そんな照れなくてもいいのに」

「ちよつと待った。なんか会話になってないぞ」

「ごまかさないで！」

「何をだよ！ ていうか会話になってないって言うてるだろ」

「……………」

なんか吉田がポカンとしてる気がする。

「ね！ だから言ったでしょ。和也君は面白いって」

「ふふ。そうね」

はぁホント疲れた。

席に戻る。

「あれ？ 和也君どこ行くの？」

「どこって自分の席に戻るんだよ」

「もつと喋ろうよ」

「無理、疲れた」

「ちえーケチ」

「ケチで結構」

長塚と話すと体力がごっそりと持っていかれるわ…

第四話 「見たらわかるだろ？ 先制攻撃だよ」

今日は日曜日、つまり休日だ。

今現在俺は一人で街をぶらぶらしている。

俺の休日を過ごし方は日によって違う。

昼過ぎまで寝ていることもあれば早起きすることもある。

ひどい日には夕方まで寝ていることもある。

早起きをしたときは今みたいに一人で出かけたりすることが多い。

はつきり言ってしまうえば俺はいつも休日に暇を持って余している。

だから何か面白いことがないかと一人で街に来ているわけだ。

「なんかのどが渴いたな」

近くに自動販売機を見つけたので俺は財布をポケットから、

「あり？」

財布がない。

掏られたとは思えない。

そうなるか…

「家か…」

俺は財布を家に忘れたらしい。

最悪だな。

こんな日はよくないことが起こる気がする。

今日はもう帰った方がいいかもな。

俺は帰ろうと来た道を戻ろうとしたとき、

「いいじゃん俺らと遊ぼうぜ」

「なんか奢るからさ」

「ほら一緒に行こう」

ナンパをしている連中が目にとまった。

「迷惑なんで」

ナンパされてるのはどうやら長塚のようだ。

何で休みの日まで長塚の顔を見なきゃならんのだろう？

ちなみにナンパされているのが長塚だから気になったわけではない。俺が気になったのは、

「そう言わずにさ」

「俺らと一緒に遊ぼうよ」

「ほら一緒に行こう」

ナンパをしている三人組だ。

正確には三人組の髪型だが、

「ねえ無視しないでさあ」

「ちよつとだけでいいから」

「ほら一緒に行こう」

上からアフロ、モヒカン、リーゼントというものすごい組み合わせなのだ。

ところでさっきから気になっていたのだが、リーゼントの奴さっきから「ほら一緒に行こう」としか言っていないのだがほかに言えることがないのだろうか？

「もうやめてください。しつこいですよ」

長塚もからまれて迷惑してるようだ。

別に見なかったことにしてもいいんだけど

長塚には前に貰ったアンパンの借りがあるんだよね…

助けるべきだよなあ。

となると問題はどうかやって長塚を助けよう？

彼氏の振りでもするか？

でもなあそんなことしたら……

「おい長塚」

「え？ 和也君」

「すみませんこいつ俺の彼女なんで」

「はあ冴えない顔じゃがって失せる」

「何？」

「てめえなんかお呼びじゃねえんだよ」

「言ってくれんじゃん、いかれた髪型しやがってそつちが失せる」
「ああん言ってくれんじゃねえか」
「ちよつくら痛い目みさせてやんよ」

……とかなって思いつきりサンドバックにされるよなあ。

「対一ならそれなりに自信はあるが二、三人を相手にしたら確実に負ける。」

とすると俺がすべきことは…

「ねえねえ、いいでしょ少しくらい」

「だからしつこいって……へ？」

「んん？ どうしたの？ 一緒にお茶してくれる気に ぐぐらっ

！！」

俺がすべきことそれは

「な！？ てめえいきなり何しやが へぶちっ！！」

不意打ち。

正々堂々と喧嘩して勝てないなら不意打ちで相手の数を減らす。

モヒカンとリーゼントは倒した。

残るはアフロ！

「か、和也君！？」

「よう長塚、こんなところで奇遇だな」

「奇遇だなじゃないよ！ 何してるの！？」

「見たらわかるだろ？ 先制攻撃だよ」

「いきなり攻撃しちやだめだよ！」

「よく聞けよ長塚。宮野家の家訓その一、やられる前に殺れ！」

「ホントにそんな家訓あるの！？」

「たった今俺が作った家訓です。」

「いい度胸してんじゃねえか」

俺の目の前にはアフロ。

他の二人が目を覚ます前にかたずけるか。

「一つ聞きたいことがあるんだけど」

「ああん？」

「なんで三人そろってそんな愉快的な髪型してんの？」

「バカにしてんのかてめえ、超かつこいいだろが」

「どうやらこいつらは髪型どころか頭も愉快的な方たちのようだ。」

「ところでアフロ、後ろを見てみな」

「ん？」

「隙あり！」

俺は全力で蹴りをアフロの股間に放った。

「おふう○？ %！」

我ながら恐ろしいことをやってしまった。

「ほら行くぞ」

この隙に長塚の手を取ってこの場から離れよう。

「はぁ疲れた」

「ありがとね和也君。助かった」

「これで貸し借りはなしな」

「え？ 何のこと？」

「前にアンパンくれただろ。これで借りは返したから」

「別にアンパンくらい」

「いいんだよ。これだ貸し借りはなしいいな？」

「うん。わかった」

疲れたけど借りは返せたし一件落着かな？

「でもやり過ぎじゃなかった？」

「何が？」

「あの人たちいきなり殴っちゃたりして」

アフロたちのことか。

「別にいいんだよ。ああいう連中にはあの方法が一番だ」

「でもどうせ助けてくれるんだったら彼氏の振りでもしてくれればよかつたのに」

何故か少し残念そうに言う長塚。

それも考えたんだけどな。

「その場合俺はボコボコにされてたよ」

ああやだよ。

「んじゃ俺帰るわ」

「帰っちゃうの？」

「特に目的があつてここに来てるわけでもないしな」

「なら私の買ひ物に付き合つてよ」

「は？」

「特にやることもないんでしょ？ ならいいじゃない」

「そんなことは誰か友達にでも頼めよ」

「だから友達のと和也君に頼んでるんじゃない」

「俺以外の奴に頼め」

「真理ちゃんやほかの子も今日はようがあるんだって」

「そりゃ残念だったな」

「ねえだめ？」

なんか長塚が上目使いで言ってきた。

これはあれか？

狙つてやってるのか？

不覚にも一瞬可愛いと思つてしまった。

「それに一人でいたらまたナンパされるかもだし」

長塚ははつきり言つて可愛い方だからありえなくはない。

「和也君がいてくれたら心強いなあ」

だんだんと追い詰められている気がするな。

「それとも私と一緒にいるの嫌？」

今にも泣きだしそんな顔をしてそんなことを言われると正直断れない。

これはもう俺の負けだな。

「わかったよ。少しだけお前の買い物に付き合えばいいんだろ」
「いいの？」

「いいよもう俺の負けだ」

「やった！ ならさっそく行こう」

そうして俺は長塚の買い物に付き合うことになった。

「んで、どこ行くんだ？」

「ん〜とね、まずは服を見ようかなって思って」

これはもしや荷物持ちとかさせられるのか？

いやまあ別にいいんだけどな。

そんなこんなで俺は今長塚と一緒に服を見て回っているわけだが、

「あ、この服可愛いかも」

長い！

よく女の子の買い物には時間がかかるなんていうがホントに長い。

もう結構な時間服を見ている。

「和也君この服私に似合うと思う？」

そういつて長塚は薄ピンクのカーディガンを俺に見せてきた。

「ん、まあ似合うと思う」

ていつか長塚なら何でも着こなす気がする。

そういえば、

「今更だけど長塚の私服初めて見たな」

長塚はチエック柄のマキシ丈のワンピースに白のカーディガンを着

て、涼しさが感じられる格好だ。

「ホントに今更だね。それに私だって和也君の私服姿見るの初めて

だよ」

俺はジーンズで黒のインナーにTシャツを着ている。

ちなみにTシャツは家にあったものを適当に選んで着た。

俺はあまり服装を気にしない。

変に目立つような服装だったり、あまりにもダサい服装でなければ

地味でも何でもいいと俺は思ってる。

「もうこんな時間だね。そろそろお昼にしようか」
気が付けばもう昼だった。

相当な時間服を見ていたことになる。

「お昼どうする？ ファミレスにでも行く？」

長塚が昼はどうするか聞いてきたが、

「悪いが俺は昼飯はパスだ。どうしても食べたきゃ一人で行ってくれ」

「え？ どうして？」

そんなこと決まってる。

「財布を家に忘れたからだ」

「じゃあ今お金持ってないの？」

「ああ。財布を忘れたことに気が付いて家に帰ろうとしたらナンパされてる長塚を見つけてな」

「そして今に至ると」

「そういうことだから俺は昼飯が食えないわけだ」

「そっか。ならそっだな…」

「どうかしたか？」

「なら私がお昼奢ってあげるよ」

それは魅力的な提案だが

「そうするとまた借りができるから遠慮する」

「私は借りとか気にしないからさ」

「俺が気にするんだよ」

「だったらお昼奢る代わりに午後私のお買い物に付き合っ
て。それでいいでしょ」

つまり今日一日長塚の買い物に付き合うことになるわけか…
正直なところ腹減ってるんだよな。

「うん」

「ねえいいでしょ。好きなだけ奢ってあげるから」

「…わかった。それでいい」

空腹には勝てなかった。

「ん、なら行こっ！」

俺は妙にご機嫌な長塚と昼飯を食うことにした。

その日は結局ホントに一日買い物に付き合わされた。

「今日はありがとね」

「俺も昼飯奢ってもらったからなお互い様だ」

今俺たちは家に帰っている途中なのだが

「ところで長塚の家ってこの辺なのか？」

「そっだよ」

俺の家もこの辺りなのだが意外と家が近くなのかもしれない。

「あ、私こっちだから」

「家まで送ってくか？」

「ううん大丈夫。私のうちもう近くだから」

「そうかじゃあまたな」

「うんまた明日」

俺は長塚と別れて家に向かう。

休日なのに休めた気がしない一日だったな。

でもなんだか少し楽しかったような気がしないでもない一日だった。

第五話「はあ、空が青いや」

休めた気がしない休日が終わる

週明けの月曜日

俺は今通学路を歩いている。

俺の周りに同じ学校の生徒はいない。

何故なら俺はいつも家を出る時間が早いから…

だったら良かったのだが、そうではなく今俺は絶賛遅刻中なのである。

起きて時間を見た時にはもう間に合わないと確信した。

なので俺は諦めていつもよりゆっくりと学校へ向かっている。

今学校は一時間目の途中だろう。

もう学校には着くので一時間目が終わる前までには間に合うと思う。授業なんてどうでもいいのだがノートを写さないといけない。

先生の話はまともで聞かないくせにこういったことは真面目にやっている。

ノートなんて友達に見せてもらえばいいとか思うだろうが

残念なことに俺にはノートを見せてくれるような友達などいない。

別に頼んだのにノートを見せてくれないとかそういう意味ではなく、気軽にノートなどの貸し借りのできるほど仲のいい友達がいらないという意味である。

まあそれはそれで残念な奴だとは思う。

だが俺が仲のいい奴を作らなかつた結果なので文句は言わない。

他の奴に悲しい奴とか言われても俺は悲しいなんて思わない。

俺は自分で決めてこういう生き方をしてるのだから。

不便だとは思ったりはするが…

実際にクラスの誰かに頼めばノートぐらい貸してはくれるだろうが俺はそうしない。

何故かわからないがそうしたくないのだ。

そんな理由で俺は今までのすべての授業のノートを自分の力だけで写している。

ラッキーなことに高校生になってからは熱が出るときはいつも休日だったので特に問題はなかった。

前に一度だけ金曜日の朝に微熱が出たことがあったのだが、次の日は休みなので無理をして学校に行ったことがある。

こんなことをしていたため、俺は去年一度も学校を休むことはなかった。

我ながらバカなことしてんなあ。

何度そう思ったことか。

気が付けばもう学校だった。

俺は靴を履き替え教室へ

ガラッ

「遅刻だぞ宮野」

言われなくてもわかってる。

教室に入ってきた俺に言ってきたのは地理の教師の原田先生だ。

男なのだが噂では女装が趣味らしい。

ホントかどうかは知らないが。

「すみません。寝坊しました」

俺は自分の席に着いて授業の準備をする。

急いでノートを写さないよ。

俺はノートを開いて黒板を…

「は？」

思わず声を上げてしまった。

「どうかしたか？ 宮野？」

「なんでもないです」

黒板にはぎっしりと字が書かれている。

そりゃもうぎっしりと。

黒板の隅から隅へと。

何で遅刻した今日に限ってこんなに書かれてるんだよ…

いつもはこんなに書かないくせに、

少ない日なんか黒板に三、四行ぐらいしか書かないくせに。

とにかく写さないと。

授業が終わるまで後十分。

原田先生はさらに文字を増やしていく。

「ここ消すぞー」

「あつ、少し待ってください」

やばい急がないと字が消されてしまう。

「いいか？」

「あ、はい。そこはもういいです」

正直間に合う気がしないが諦めるわけにはいかん

キーンコーンカーンコーン

アウト！

間に合わなかった。

「今日はここまでだな」

「起立、礼！」

嫌まだだ。

まだ黒板の字は残ってる。

俺は諦めずに黒板の字を…

「日直めんどくさー」

日直に字を消された。

めんどくさいならやらなきゃいいじゃん！

結局黒板の字は消され、俺はノートを写すことはできなかった。

昼休み俺はいつも通り屋上で昼飯を

「はあ〜」

食べてはいなかった。

別にこんなことぐらい気にしなくてもいいとは思っが、
ここまで頑張ってきたのでなんか悔しい。

「はあ、空が青いや」

空を見て現実逃避する俺。

屋上にいるので上を見れば空が広がっている。

広大な空に比べればこんなことはちっぽけなこと。

なんて割り切れるはずもなく。

「あーくそっ」

いつそのことこのままぐれてしまおうか。

そんなことを考えていると

ガチャッ

「は？」

誰かが屋上に来たようだ。

つてやばい！

もし教師だったらなんて言い訳すりゃいいんだ！？

ホント今日は厄日だな。

もういつそこから飛び降りてしまおうか…

「あ、和也君いた」

「……………」

長塚がやってきた。

どうやら今来たのは長塚だったらしい。

「……………」
「和也君どうかしたの？」
「いやもうさ…ここから飛び降りようかなくて」
「ええ！？　だ、だめだよ！　そんなことしちゃ」
「ふっ」
「なんで鼻で笑うの！？　大体なんで飛び降りようなんて」
「そりゃ俺が寝坊したせいで…」
遅刻してノートが…ノートが！！
「え、そんなこと？」
「そんなことだと！」
「何でそんなに怒るの！？　一回遅刻した遅刻くらいで…」
「遅刻のことなんかどうでもいいわ！！」
「ええ！？　なら何で怒ってるのか余計わからないよ」
「くそつ何で俺が遅刻した日に限ってあんなに書いてることが多いんだよ…」
「ああ、今日の地理書くこと多かったよね」
「油断した。ノートを写すだけと思ってゆっくり来たのが間違いだった」
「ダッシュで学校に来てればよかった。」
「和也君ノート写すの間に合わなかったの？」
「そうだけど…」
「ならノート貸そうか？」
「うん？」
「だからノート貸してあげるよ」
「……………」
「……………」
「……………」
やはりここは借りておくべきか…
でもよくよく考えてみると俺って長塚に助けてもらっこと多いよな。
アンパン貰ったり、昼飯奢って貰ったり。
また借りを作ることになるんだよな。

「あ、もう誰かに借りてる？」

「いや、そうじゃないけど」

借りを作ったのなら返せばいいよな。

ここまで教師の言うことは全て聞き流しノートを写すことだけを頑張ってきたんだし、

借りれるもんは借りよう。

「ノート貸してもらおうわ」

「わかった。後で教室で渡すから」

「ああ」

そっぴやなんか忘れてる気が…

「和也君って昼休みいつもここに来てるの？」

「そうだけど……ってなんで長塚がここに来てんだよ!？」

聞くのすっかり忘れてた。

「朝に和也君とお話しできなかつたから昼休みにしようと思つてたんだけど、よく考えてみると和也君って昼休みいつも教室にいないからこっそりと後をつけてきた」

ホントに油断してた。

いつもはもつと周りを気にしてたんだけど今日はノートのことですつきまで地味にへこんでたからなあ。

「屋上つて鍵が掛かつて一般生徒は入れないはずだけど」

「俺は鍵を持つてるから問題なく来れる」

「何で和也君が屋上の鍵なんか持つてるの？」

「秘密」

「……………」

長塚がこつちを睨みつけてくる。

「ジーーーー」

「……………」

「ジーーーー」

「……………」

「ジーーーー」

「ジーーーーって口に出しながら睨みつけるのやめてくれるか」

「ジーーーー」

「だから…」

「ジーーーー」

「…わかった。教えてやるから」

「ホント!？」

何故だろう？

長塚には勝てない気がする。

「俺が屋上の鍵を持つてる理由だよな」

「うんうん」

「それは去年に俺が拾ったからだ」

「拾った？」

「そう拾った。去年の今頃にな廊下に落ちてたんだよ」

「それをそのまま自分の物にしちゃったの？」

「最初は誰かの家の鍵かとも思ったんだけど、よく見たら学校のだったからな」

「だからって自分の物にするのはどうかと…」

「最初は大変だった。どこの部屋の鍵かわかんなくて休み時間になるたびに手当たり次第この鍵が合うとこさがして」

「そんなことずっとやってたの？」

「結構苦労はしたけどな。それで屋上の鍵だということが判明して今に至る」

「先生にばれたりしなかったの？」

「ばれそうになったことはあつたけど何とかやり過ごした。それで昼休みに教師が来ることはないとわかってからは昼休みだけ来てる」

「だから和也君昼休みに教室にいないんだ」

「このこと知ってんの俺だけだからのんびりできんだよ」

「でも私も知っちゃたよ」

そう問題はそれだ。

「このこと誰にも言わないでもらえると助かるんだが…」

「それはいいんだけど…」

なんか嫌な予感がする。

「私も時々ここに来ていい？」

そんなことだろうと思ったださ。

「俺ここで一人で過ごす時間が好きだったりするんだけど」

「たまに来るだけだから。お願い！」

どうしたものか…

さっき作った借りをこれで返したことにすればいいか。

来るのはたまにって言ってるし

「いいぞ。たまになら」

「いいの？」

「いいって言っただろ」

「やった！」

ずいぶんと嬉しそうだな。

「あ、早く食べないと時間が無くなっちゃう」

「ん、そうだなさっさと食うか」

「うん！」

俺は袋からパンを取り出し、

長塚は弁当の蓋を開け

…ん？

「お前も一緒に食うのか？」

「え？ そうだけど」

長塚は「ほらっ」と俺に弁当を見せてきた。

長塚の弁当には卵焼きにウインナー、ほうれん草のおひたし、いんげんのベーコン巻き。

ご飯にはふりかけがかかっている。

「へへ美味しそうな弁当だな」

今更文句を言ったところで長塚は絶対にここで昼飯を食べるだろうから、

俺はもう何というか…諦めました。

「え、そう？ これ私がつつただけど」
「へえそうなんだ」

長塚つて料理もできんだな。

「よかつたら食べる？」

「ん？ いいのか？」

正直なところ食つてみたいと思う。

「うん。よかつたらだけど……」

「なら卵焼き貰つていいか？」

「うんいいよ。はい、あゝん」

長塚は箸で卵焼きを摘み俺の口元に運んできた。

「……何やつてんだ？」

「え？ だからあゝん」

「いや自分で食べるから」

「えゝいいじゃん。ほら」

「いやだからいいつて」

「ジーーーー」

「またそれが」

「ジーーーー」

「二度も同じ手には掛からないぞ」

「ジーーーー」

「まだやるか……」

「ジーーーー」

「……」

きりがないので俺は長塚が諦めるまで無言で目を合わせる

「ジーーーー」

「……」

「ジーーーー」

「……」

「ジーーーー」

「……」

「え、えつと」

長塚が頬を赤くしながら目をそらした。

勝った！

長塚に勝った！

「卵焼き貰うぞ」

俺は弁当箱から一つ卵焼きを摘み口に入れた。

「あつ」

「（もぐもぐ）」

「えつと、どうかな」

「（ゴクツ）ああ美味いぞ」

冗談抜きで美味かった。

「そ、そっかよかった。もっと食べる？」

「さすがにこれ以上食ったら長塚の分がなくなるだろ」

「別にそんなこと気にしなくていいのに」

「俺が気にすんだよ」

食べたくなかったと言えば嘘になるが。

「なら今度和也君の分のお弁当作ってきてあげようか？」

「……………」

とてつもなく魅力的な提案をしてきた。

長塚の弁当を食う前なら「いらん」と一蹴できただろうが

今の俺はもう一度食べたいと思ってしまうている。

「……………機会があつたら頼む」

「うん！」

頼んでしまった。

それほどまでに長塚の弁当は美味かった。

「なら今度一緒にお昼食べるときに作ってくるね！」

「あ、ああ。よろしく頼む」

悔しいことに早く長塚の弁当をもう一度食べたいと思ってしまうた俺だった。

第六話「うん。ちょっと待とうか？」

長塚と弁当の約束をして数日が立った。

今日の朝に長塚から

「今日お弁当作ってきたから一緒に食べようねっ」

と言われたので俺は今屋上で長塚を待っているのだが…

「遅い」

長塚が中々来ない。

といつてもまだ昼休みになってから五分ほどしか経ってはいないのだが、

教室からここまで来るのにそんなに時間はかからないはずだ。

ガチャツ

「ごめん。待った？」

長塚がやつと来た。

「多少待った」

「む、そこは「俺も今来たばかりだから」とか言つところですよ」

「いやだってホントのことだし」

「和也君ノリ悪いな。せっかくわざと遅れてきたのに」

「うん。ちょっと待とうか？」

なんか今聞き逃せない言葉があつたぞ？

「今わざとつて言つたか？」

「？」

「だから今わざと遅れてきたつて言つたよな？」

「言つたけどどうかした？」

「つまりお前はさっきの「ごめん待った？」のやり取りがしたくてわざと遅れてきたと」

「うん！」

こいつはホントにバカなんじゃないだろうか？

俺は思わず頭を抱えてしまった。

「それより早く食べよう。時間無くなっちゃうよ」

お前がもつと早く来ればとすぐに食ってただけだな。

そう思ったが口には出さなかった。

というか口に出す気にもなれなかった。

「はい。和也君のお弁当」

「おう。サンキュー」

弁当箱は二段になっており一段目の中身は豚肉の生姜焼き、ほうれん草のごま和え、卵焼き、ポテトサラダ、プチトマト。二段目にはご飯がある。

「んじゃ。いただきます」

俺はさつそく卵焼きを食べる。

長塚から事前に何かリクエストはあるかと聞かれていたので俺は卵焼きを頼んでいた。

「なあ長塚」

「何？」

「この卵焼きの作り方教えてくれない？」

「卵焼きの作り方？」

「そう。この卵焼き気にいったんだよね」

数日前に長塚の卵焼きを一口貰ってから何度か卵焼きを作ったのだがどうにもこの卵焼きを超えるものが作れないでいる。

「それって美味しいってこと？」

「それ以外にどういう意味があるんだよ？」

「そっか。ふふ」

「どうした？ ついに頭がおかしくなったか？」

「失礼なこと言わないでよ。そんなこと言うなら作り方教えてあげないからね」

「…すみません。教えてください」

「ふふ。やーだよ」

「お前教えるつもりないだろ」

「ありやばれた？」

謝ったりしなきゃよかった…

「でもまた食べたいって言うてくれるなら私が作ってあげるからね？」

「…またお願いします」

長塚が作ってきたのを食べて自分で研究することにしよう。

「ところで和也君って料理できるんだね」

「まあな。両親共働きだからよく自分で晩御飯とか作る」

そのせいで最近家は親が居ても「最近仕事で疲れてるから代わりに作って〜」とか言われるようになったっちゃったけど…

「俺は自力で料理できるようになったけど、長塚は親にでも教わったのか？」

「小さいころからお母さんのお手伝いしてて、色々と作り方とか教えてもらったんだ」

「いいよな。ちゃんと教えてくれる人がいて」

俺なんか昔母親に料理のコツを聞いたたら「包丁の使い方さえ気を付ければ後は気合で何とかなる！」とか言われるだけだった。

おかげで包丁で自分の指を切るなんてことはあまりしなかったが、ちゃんとした物を作るようになるまでに結構時間がかかった。

「一人だけでどうやって料理覚えたの？」

「料理の本を読みながら」

過去に戻って昔の自分を褒めてやりたい。

この後も俺は母親のことを愚痴ったり、長塚と他愛もない話をしながら昼休みを過ごした。

俺は今、今日の晩御飯の献立を考えながら帰宅していた。もう電車は降りて家に向かっていているので少しすれば家に着くはずだ。今日も親は仕事で「遅くなるから晩御飯はよろしく!」とか言われたので自分で晩御飯を用意しなくてはならない。材料はまだ残ってははずだから何を作るかは材料を見て決めるかな。そんなことを考えているうちに家に着いた。

「ただいま」

誰も居ないはずなので独り言感覚で呟いたら

「お帰り〜!」

と居間のから声が返ってきた。

「は?」

俺は慌てて居間に行くと

「どうしたのよ。そんなに慌てて?」

そこには俺の母親がテレビを見ながらくつろいでいた。

「なんで母さんがいるんだよ!?!」

「あら? 自分の家に帰ってきちゃ悪いの?」

「そうじゃなくて仕事は?」

「実は今日ね、仕事が思いのほか順調に進んで早く終わっちゃった」
母さんは「テヘツ」とか言いながら俺に説明してくれた。
いい歳にもなつてテヘツとか恥かしくないのだろうか?

「和也そこに正座」

「なんで!?!」

この人は俺の心の中でも読めるのだろうか?

「まあね」

「マジで!?!」

驚いた。この人は超能力者か何か?

ていうか俺にプライバシーは?

「私の前では無に等しいわね」

「もう俺が喋らなくても会話が成立してるんだけど...」

「ちなみにこの能力は和也限定よ」

何でだよ!?

よりもよって何で俺限定!?

「はあ。冗談よ冗談。私にそんなことできるわけないじゃない」

「いやでもさつきから思いつきり心の中読まれたんだけど…」

「全部声に出てたわよ」

「え? マジで?」

黙って頷く我が母。

マジでか…

でも俺にはそんな覚えないんだよな。

「独り言ってそんなもんよ」

そうか。そうなのか。

「ところで俺声に出してないのにまた会話成立したんだけど」

「え? ああ、うん。いや声に出してたわよ。絶対!」

「……………」

何故か妙に焦ってない?

「あ、焦ってなんてないわよ」

「……………」

「和也。しつこい男って…ねえ?」

ま、まあいいか。

これ以上聞かない方が身のためだと思う。

母さんの声のトーンが低くなり、目のハイライトが消えた瞬間俺は本能的にそう思った。

みやのじゅん 宮野純子。俺の母親にして天敵。

母さんが敵に回ったら俺は勝てないと思う。

その昔俺が小さい時のこと。

よく母さんに遊び相手になってもらっていたのだが…

鬼ごっことかゲーム対戦とかで母さんに勝った覚えが一度もない。

鬼ごっこでは母さんが鬼になった瞬間全力で追いかけられた。

小さかった頃の俺にとっては本物の鬼と同じくらいに恐ろしかった。

ゲームにしたってそうだ。

母さんは「私あんまりこういうのってやったことないんだけど」とか言ってたくせに、いざゲームをすると圧倒的な差でコテンパンにされ、プライドをずたずたにされた。

他にもたくさんあるのだが、特に酷かったのはかくれんぼだ。

俺が鬼で十数えてから母さんを探したのだが、いつになっても見つけることができなかった。

周りが暗くなってしまったので俺は泣きながら家に帰ると家に母さんがいた。

いくらなんでも小さい子供を置いて家に帰るのは酷いと思う。

家が近かったからよかったものの、下手をしたら迷子になって帰ることができなかったかもしれないし、事故にあってたかもしれない。昔そのことについて文句を言ったところ「ちゃんともしもの時の対策はあったわ。私が無計画に子供を置いて帰るわけじゃないでしょう」と言われた。

俺としては置いて帰らないでほしかったが……
そんなこんなで俺は母さんにはできるだけ逆らわないようにしている。

歳は知らない。

特に興味もないしな。

一度だけいくつなのか聞いたことがあった。

「永遠の十七歳よ」とか言ったのを鼻で笑ったのだが、その後の記憶がない。気が付いたら次の日になっていた。

仕事は…あれ？

仕事は何してたっけ？

思い出せない。

「母さんって仕事は何してるの？」

せつかくなので聞いてみた。

「あれ？ 昔に言わなかったっけ？」

「いや覚えがない」

「昔何度も聞かれたことあるんだけど」

俺って忘れっぽいのかな？

「それで何やってるの？」

「そんなことより今日の晩御飯は何？」

「何だよ。いきなり」

「私お腹すいちゃって」

「ていうか家に居るんなら母さんが作ってよ」

「仕事で疲れちゃって」

「そのセリフ今日で何度目だよ。ここ最近母さんの作った飯食った覚えないんだけど」

「そうねえ。私もここ最近料理した覚えがないわね」

「だったらたまには料理した方がいいよ」

「まあまあ。で、今日の晩御飯は何？」

「そんなに料理するのやだ？」

「言わなくてもわかるでしょう？」

「ですよねー」

「で、今日の晩御飯は何？」

「はあ。ちよつと待って」

冷蔵庫には…思ってたよりも材料あるな。

「なんか食べたいのある？」

「えーと、肉じゃがとか」

肉じゃがね…

この材料なら作れそうだし。

「わかった。今から作るわ」

さっさと作ることにした。

…あれ？ 何か忘れてるような？

まあいいか。

それからしばらくして

ガチャッ

「ただいま」

父さんが帰ってきた。

宮野健斗。母さんとは大学で知り合ったとか。
みやのけんと

「あ、お帰りなさい」

母さんが父さんに近寄っていく。

うちの両親は結構仲がいい。

他の家がどんな風かは知らないが、うちはホントに仲がいい。

「和也。ただいま。」

「お帰り」

「お、また和也が料理してるのか」

「母さんじゃなくて残念だったね」

「いやいや、そんなことないぞ」

「でも母さんの作ったご飯の方がいいでしょ」

「まあ純の作った料理も食べたいな」

「え〜!? なら私が作ったのに」

ミスった。こんなことなら「父さんも母さんの作った飯が食べたい

んじゃない?」とか言っただった。

母さんは父さんには結構あまい。

怒るときは怒るし、喧嘩だってするがすぐに仲直りする。

他の人たちが見てもお似合いの夫婦なんだろう。

「父さんも仕事今日は早いんだね」

「ああ。今日は順調に進んでな」

父さんの仕事は…

…あれ?

「父さんって仕事何してるんだっけ?」

「ん? 前に言わなかったか?」

「うっん。覚えがない」

「そうだったか。ところで今日は肉じゃがなんだな」

「その手は効かないよ。さっき母さんにも…」

.....

「あ！？ 母さんに話誤魔化された！！」

「あら。ついにはれちゃった」

まったくきずかなかった。

「昔はこれでころつと忘れてくれたのに」

「.....」

思い出した。

昔何度か母さんに仕事のことを質問はしたが、そのたびに誤魔化されてきた。

道理で仕事何してるかわからないわけだ。

「ところで仕事全部終わらせてきたの？ 私より量あったけど」

「まあね。今日の分は何とか」

「待った待った待った。まさか...」

「ええそうよ。私たち同じ職場で働いてるの」

新事実発覚！！

「はあ。で、二人は何の仕事してるのさ」

「ふ、子供のあなたにはまだ早いわ」

「え、ちよつと何の仕事してるの？ マジで」

母さんに聞いてもまた誤魔化される気がするので父さんの方を見て聞くと

「そうだね。和也にはまだ早い」

マジでこの人たちは何をしてるんだああああああああああ！！

「え、ホントに何してるの？ やばいこととかしてないだろうね！

？」

「そんなことはしないわよ。至って普通の仕事」

「ホントだろうね。ならいいんだけど...」

なんだか両親が急に恐ろしくなってきた。

「父さん仕事のこと教えてくれない？」

「俺はちよつと着替えてくるな」

父さんは自室に着替えに行ってしまった。

逃げたよあの人。

「母さん…」

もうなんか疲れた。

「和也。しつこい」

凄くドスの利いた声で言う母さんを見た瞬間

「もうすぐ飯できるから」

無理だと悟った。

これ以上はもう無理だ。

今日はこれくらいにしておこうとそう思った。

「卵焼きの味付け変えたの？」

現在食事中。

「まあ。不味い？」

昼にも卵焼きは食べたが、味を覚えているうちに作っておきたかった。

長塚の卵焼きにはまだほど遠い出来だけ…

「そんなことはないけど珍しいわね」

「何が？」

「和也つてあんまり味付け変えたりしないじゃない」

確かに母さんの言うとおりだ。

とりあえず作れるようになったらそれでいいと思っているので、俺は味付けを変えたり、作り方を変えるといったことはしない。

「でもこれはこれでいいんじゃないか？」

そう言ってくれるのは嬉しいがこれは失敗作だ。

俺が目指してるのは長塚が作った卵焼きだ。

「ところで和也。学校は楽しい？」

なんかベタな質問だな。

この質問何回かされた覚えがあるんだが…

「ぼちぼち」

そういうと、父さんと母さんは二人して驚いた顔をした。

「えっと…どうかした？」

「いやまさかあなたの口からそんな言葉が出てくるなんて…」

「どういうこと？」

「だって今まで楽しいかって聞いても、別にとか、普通とか、いつも通りとかしか言わないじゃない」

「そうだったか？」

「何かいいことがあったの？ 友達できたとか？」

「そう言われて何となく長塚が思い浮かんだ。」

…友達か。

高校に入ってからあんまり人と関わらなかつたからな…

高校で一番仲のいい奴はと聞かれたら俺はおそらく長塚が頭の中に浮かぶと思う。

高校に入ってからあそこまで俺に近づいてきたのは長塚だけだからな。

「…友達かどうかはわからんけど、話し相手ならできたかな」

「そういうと母さんは嬉しそうに」

「そう」

と言って笑っていた。

父さんは

「その子うちに連れて来たらどうだ？」
なんて言い出した。

その後二人にそいつはどんな子なのかと問いただされたが、すべて聞き流し晩飯を黙々と食べ続けた。

第七話「俺を周りのリア充たちと一緒にするな」

雨はいまいち好きになれない。

雨の日はじめじめするし、傘を差しても足は濡れるし、何より屋上に行けない。

雨の中傘を差しながら昼飯を食うなんてことをするはずがなく、今は学食で昼飯を食っている。

学食にはそれなりに人がいる。

俺は人が多いところはあまり好きではない。

なのでさっさとこの場から離れようと昼飯を黙々と食っている。するとポケットの中の携帯電話が振動した。

メールのようだ。

差出人は本多翔太。

ほんだしょうた

中学の時唯一仲の良かった奴だ。

中学を卒業してからもこうして時々連絡が来る。

俺はメールを開封した。

『和也！ 久々に会わないか？ 都合がいい日を教えてくれ！』

どうせ毎日暇を持って余しているので

『今週の日曜に晴れたら、十時にいつもの駅前で集合』

曜日と時間、集合場所だけをを書いて送信した。するとすぐに

『了解！』

という返信が来た。

これで今週の休日は用事ができた。
暇をもてあそばないで済む。
俺は急いで昼飯を食べ教室に戻った。

日曜日俺は約束通りに指定した場所で翔太のことを待っている。
今日は見事に晴れた。

周りにも俺と似たように誰かと待ち合わせをしていると思われる人が何人かいる。

この人たちはデートだろうか？

リア充め爆発しろ！！

「あれ？ 宮野君？」

「ん？」

誰かに名前を呼ばれたので声のした方を見てみると、

「吉田？」

我がクラスメートの吉田がいた。

「こんなところで偶然ですね」

「そうだな」

「……………」

… 会話が続かない

「よ、吉田は誰かと待ち合わせか？」

「はい。宮野君は？」

「俺も待ち合わせ」

沈黙は気まずいので何とか会話を続けようと頑張っていると、

「真理ちゃん。ごめん。待った？」

「うっん。そんなに待ってないよ」

長塚がやってきた。

「あれ？ 和也君？」

「よう」

ミスったな…

吉田が待ち合わせてるのが長塚だったなんて。

「こんなところで偶然だね」

「そうだな」

このやり取りさっき吉田とやったな…

「これってもしかして…運命？」

「なわけあるか」

なんか長塚との遭遇率は結構高い気がする。

運命というより呪いじゃね？

「ところで和也君はこんなところで何してるの？」

「吉田。教えてやれ」

「ええ！？ 私？」

「真理ちゃん知ってるの？」

「う、うん」

「そりゃ今さっきまで話してたからな」

いまいち会話続かなかったけど…

「真理ちゃん教えて？」

「待ち合わせしてるんだって」

「誰と？」

「さあ…？」

「和也君。誰と？」

「誰だっついていいだろ」

「もしかして彼女！？」

「俺を周りのリア充たちと一緒にするな」

彼女いない歴〃年齢の俺。

「中学の時と友達とだよ」

「和也君友達いたの！？」

「有希ちゃんそれは失礼だよ」

吉田の言うとおりだ。

いくらなんでもそれは失礼だと思う。

と言っても翔太以外友達といえる奴はいない気もするが…

「和也君の友達ってどんな人？」

「別にどんな奴でもいいだろ」

「いいじゃん教えてよ」

「そんなこと聞いている暇があったらさっさと吉田とどこかに行けよ。」

吉田が暇してるぞ」

吉田に助けを求めてみると、

「そんなことないですよ。私二人のやり取り見てるの好きなんで

あれ？」

吉田は助けしてくれると信じてたのに！

「だつてさ」

何故か勝ち誇った顔をする長塚。

なんか悔しい。

「お、いたいた。和也！」

このタイミングで来るか…

「何で来たんだよ。翔太」

「ええ！？ 何でいきなりそんなこと言うんだよ」

「ねえねえこの人が和也君の友達？」

「ん？ この子たち和也の知り合いか？」

「ああ。クラスメート」

「どうも。和也の親友の本多翔太です」

「吉田真理です」

「和也君と今一番仲のいい長塚有希です」

「……………」

「……………」

何故だろう？

翔太と長塚の間にピリピリした空気が漂っている気がする。

「俺は和也の心の友と書いて心友だ」

「私は和也君の真の友と書いて真友だよ」

何この展開？

「修羅場ですね！」

「吉田、なんか楽しそうだな…」

「はい！」

吉田がすごく生き生きしてる。

「お前和也は俺のだぞ！」

誰がお前の物になった？

ていうか男に「俺のだぞ」とか言われても気持ち悪いんだけど。

「違うよ！ 和也君は私のだもん！ それに私と和也君は言葉では

言えないような凄い関係なんだから！！」

俺は長塚の物でもない。

それに言葉では言えないような関係って俺たちただのクラスメート

なんだけど。

「そ、そんな。和也に彼女ができたなんて…」

地面に両膝を着き項垂れる翔太。

何で言葉では言えない関係が彼女になったんだろう？

「だからもう和也君にあなたは必要ないの。和也君は私に任せなさい」

い

「ふっ、俺はもう用済みってわけか。和也！ 幸せにな！」

翔太は眼の端に涙を浮かべながら走り去って…

「っておい！ 勝手に帰ろうとすんな！」

「ぐへっ！！」

俺は翔太の襟首を掴んでやった。

「何なんだお前らはツッコむのも面倒だったから何も言わずにいた

ら好き勝手言いやがって」

長塚と翔太を睨みながら、

「俺はお前らの物になったつもりはないし、長塚は彼女じゃない。

それに俺を任せる、任せないとかお前らは俺の親か何かか？」

「「親友だろ！（でしょ！）」」

「黙れ自称親友」

「まあまあ、宮野君落ち着いてください」

「はあ、もういいや。翔太来たし俺らはもう行くぞ」

「どこに行くんだ？」

ポカんとした顔で翔太が聞いてきた。

「特に決めてないけど。翔太どっか行きたいとことかないのか？」

「ない！」

そっちから誘っついて何も考えてないのかよ…

「じゃあ適当にそこらへんぶらぶらするか？」

「それでいいけどなんかつまんねーな」

「だったら何かしら予定考えとけよ」

「はいはい！」

長塚が元気よく手を挙げてきた。

「何？」

「それなら私たちと一緒に回らない？」

また面倒なことを…

「お、いいじゃんそれ！」

「お前らな…吉田からも何とか言ってくれないか？」

「いいんじゃないですか？」

吉田ならこっちの見方をしてくれると思っただけだな…

「三対一で私たちの勝ち！」

「よし。そうと決まったら…どこ行く？」

「……………」

「……………」

「おい。まさかお前たちもどこに行くのか決めてなかったのか？」

「ほ、ほらそこら辺を適当にぶらぶらしようかなーって」

俺たちがしようとしたことと同じだな…

「そうと決まったら元氣に行こう！」

ホントに翔太は元氣だな。

いや、アホなだけか…

翔太が歩き出したので俺たちもそのあとに続いて歩き始めた。
長塚と翔太の両方を相手にするのはしんどそうだな…
何で今日晴れちゃったんだろう。

第七話「俺を周りのリア充たちと一緒にするな」(後書き)

今回は少し短くなってしまいました。

なので今週中にはもう一回更新できるようにしようと思います。

感想やアドバイス、誤字・脱字の報告などありましたらよろしくお願ひします。

第八話「そ、そんなことないぞ」(前書き)

すみません今回も短くなってしまいました。

第八話「そ、そんなことないぞ」

「真理ちゃん真理ちゃん。この服可愛くない？」

「いいねそれ。あ、こつちもどう？」

「それもいいな」

今俺たちは長塚の意見で女物の服を見ている。

今いる店は色々な種類の服があり品ぞろえが豊富らしい。結構客がいる。

長塚と吉田はさつきから色々と服を見て楽しんでるようだが、俺たち男は疲れ果てて…

「なあなあこの服可愛くないか？」

「なんでお前まで楽しんでんだよ!？」

訂正、翔太も結構楽しんでた。

「だってせつかく遊びに来てんだから楽しまないと損だぞ」

「お前に女装の趣味があつたなんてな…」

「いやいやいや! 違うから別に女装が好きなのではないから」

そんな必死に否定しなくても…

でも女装が趣味なんて堂々と言えないよな。うんうん。

「なんか一人で納得したような顔してるけどホントに違うからな!」

「わかつたわかつた。で、どの服が可愛いつて？」

「ホントにわかつたのか? まあいいや、そんでこの服なんだけだな」

「…一つ聞いておきたいんだけど、その服つて…お前が着るの?」

「だから俺に女装の趣味はないつて!!」

どうしても翔太は自分の趣味を認めたくないようだ。

もしかして翔太は自分が女装が好きだつてことに気付いてないのか!?

「そついうことが…」

「何が?」

「うわ！？ 長塚…いきなり出てくるなよ」

長塚がいきなり目の前に現れるもんだから驚いた。

「なんか用か？」

「和也君にどっちの服が好きか聞こうと思って」

「お前もか…」

翔太といい長塚といい何で俺に聞く？

吉田にでも聞いた方がいいと思うんだが。

「どういうこと？」

「さっきまで翔太にこの服が自分に似合うかどうか聞かれてたんだよ」

翔太の持っている服を指さしながら言っちゃった。

「え？」

お、長塚の顔が少し引き攣った。

「だから俺にそんな趣味はないって言っただろう！？」

俺は翔太に聞こえないように顔を長塚の耳に近づけ小声で

「翔太は自分が女装が好きだっことに気付いてないみたいなんだ」と教えてやった。

「か、和也君。その…顔が」

長塚が顔を赤くして何か言ってる。

顔？ それからすぐに気が付いた。

顔を近づけていたせいで長塚の顔がすぐ目の前にあったことに。

「わ、悪い！」

急いで顔を離れた。

おそらく俺の顔も赤くなっているだろう。

「そ、それよりも今の話本当？」

「あ、ああ。おそらくな」

俺はチラチラと横目で長塚を見ながら答えた。

「っ…！」

「っ…！」

長塚と目があった瞬間急いで視線をを逸らした。

ああくそ。なんか調子狂うな…

「俺のこと忘れてない？」

…翔太のこと忘れてたわ。

「そ、そんなことないぞ」

「めっちゃくちゃ目泳いでるんだけど」

「気のせいだって。なあ長塚」

「う、うん。忘れてなんかないよ。」

「どうだか」

「それよりもその服きつと本多君に似合うと思うよ」

「おい和也！ 長塚さんに何吹き込んだ！？」

「別に何も」

「何度も言うが俺に女装の趣味はないんだからな！？」

「わかってるって」

自分で気付いていないだけなんだよな。

「あ、皆さんこんなところに」

服を見ていたはずの吉田がこっちに向かってきた。

「有希ちゃん酷いよ。勝手にどっか行っちゃって」

「あはは。ごめんごめん。和也君にどっちの服がいいか聞こうと思
って」

そういえばそんなことを言ってたな。

「俺に聞くより吉田に聞いた方がいいんじゃないか？」

「えっ？」「」

いきなり翔太と吉田が「こいつマジで言ってるの？」「みたいな目で
こっちを見てきた。

「…何？」

「いや、だって…ねえ」

「はい。ですよね」

何なのこいつら？ ケンカ売ってるのか？

「和也君ほらどっちがいいと思う？」

長塚は両手に持っている服を俺に見せてきた。

右手には薄手のチュニツク、左手には薄い緑のワンピース。
「うーん」

数秒考え、

「右手のやつ」

右手に持っているチュニツクを選んだ。

「これ？」

長塚がいちいち確かめてきた。

「そうだよ」

「ちなみにそれを選んだ理由は？」

「なんで翔太が聞いてくるんだよ？」

「いいからいいから」

「…別にただそっちの方が長塚に似合う気がしたからだけど
こういうことを言うのって意外と恥かしいな。」

「本当？」

「なんで嘘言わなきゃいけないんだよ」

「じゃあ買ってくるね！」

長塚はワンピースを俺に押し付けてレジに走って行った。

「ってそれ買うのか!？」

長塚には聞こえなかったみたいでレジで会計をし始めた。

「やはり決め手は、似合う…ですかね？」

「だろうな。言われた瞬間嬉しそうな顔したし」

後ろで翔太と吉田がこそこそ話している。

「二人で何話してんだ？」

「べつに〜」

「なんでもないので気にしないでください」

「気にしないでと言われても…」

だったららにやにやした目でこっちを見ないでほしい。

「何なんだよ」

「「気にしない気にしない」」

何この二人？ なんか怖いんですけど。

「ところで吉田は何か買ったりしないのか？」

「え？ 買ってますよ。ほら。」

吉田は紙袋を持ち上げて俺たちに見せてきた。

「うわ、いつの間に」

「吉田さん結構買ったんだね」

「はい。少し買いききました」

服ってそれなりに高かったりするんじゃないか？

金は大丈夫なのだろうか？

「お待たせ」

長塚がレジから戻ってきた。

「あれ？ 和也君ワンピースまだ持ってたの？」

ワンピースのことすっかり忘れてた。

「やっぱりそっちの方が良かった？」

「別にそついうわけじゃないけど…これどこにあったやつ？」

「それはここだよ」

長塚はすぐ隣を指さした。

「すぐそこかい」

ワンピースを片付けた後、俺たちは昼飯を取ることにした。

第九話「俺の勝ちだ！」

俺たちはそこら辺にあったファミレスに入り、今はそれぞれ頼んだメニューを待っている。

「腹減った。早く食べたい」

「まだ頼んだばかりですよ」

吉田の言うとおりだ。

翔太は余程腹が減っているのか「まだかー」だとか「はーやく」とかさつきからうるさい。

ちなみに俺はドリアを翔太はミートソースパゲティ、長塚がオムライスで吉田がカルボナーラ後は四人ともドリンクバーを頼んだ。

「とりあえず飲み物持ってこようよ」

長塚の言うとおりだな。

「なら俺がここに残ってるから三人とも行っていいぞ」

「それなら和也君の分は私が持ってきてあげるよ。何がいい？」

ここは長塚に頼んだ方がわざわざ行かなくて済むか。

「じゃあ頼む。飲み物は何でもいいや。長塚に任せる」

「了解！」

しかし結構な時間服見てたな。

てかまだ服しか見てなくね？

俺たちどんだけの時間同じところにいたんだろうな。

「和也。見て見て」

一番最初に戻ってきたのは翔太。

「って何それ？」

翔太の持っていたコップの中はなんだか濁っていた。

「俺特製ミックスジュース」

色々混ぜたのか。

「お前は子供か！」

「そんなこと言うなよ。結構美味いんだぜ。飲むか？」

「いらん」

「和也君。持ってきたよ」
次に戻ってきたのは長塚。

「ああ。ありがて」

長塚の両手のコップの中も少し濁っていた。

「お前もか」

「美味しいんだよ。私特製ミックスジュース」

こいつら揃いも揃って…

「はい。和也君の分」

「ああ」

長塚に頼んだ俺がバカだった。

でも頼んだものはしょうがないしこの一杯だけは我慢して飲もう。

「お待たせしました」

最後に戻ってきたのは吉田。

「俺が、俺がおかしいのか!？」

吉田のコップの中も濁っていました。

「わたくし特製ミックスジュースです」

「あれ？ 吉田さんって一人称私じゃなかったっけ？」

「私だと有希ちゃんとか名前が被っちゃうから変えてみました」

どうやら俺は今まで吉田のキャラを勘違いしていたらしい。

てっきり吉田はツッコミタイプだと思っただけだな…

「どうしたの和也君？ 遠い目なんかしちゃって」

「いやなんでもない。それよりお前たちは何を混ぜたんだよ？」

「よくぞ聞いてくれた！ 俺のはここにあったやつ全部を混ぜてみた」

「お前バカだろ」

もうバカの一言では済まないくらいこいつの頭が狂ってる気がするしてきた。

「長塚のは？」

「私のはね炭酸系のを全部混ぜてきた。」

「全部って？」

「コーラとメロンソーダにカルピスソーダ。ホントはもっとあれば良かったんだけど炭酸はこれだけしかなくて」

「まあ翔太のよりはましだと思います。…たぶん」

「ちなみに俺のと長塚のは同じ奴だよな？」

「うん。そうだよ」

「とりあえず頑張って飲もう。」

「吉田は？」

「私はコーラにオレンジジュースです」

「吉田のが一番まともそうだな」

「そうですか？」

「絶対そうに決まってる。」

「とりあえず飲もうぜ」

「そう言うのと翔太はジュースを飲んで顔を青くした後トイレにダッシュして行った。」

「まあそうなるわな」

「和也君私特製ミックスジュース飲んでみて」

「…わかった」

「俺は覚悟を決めて一口。」

「…どう？」

「…飲めなくはない」

「良かった」

「飲めなくはない。でもはつきり言って…」

「でも普通に飲んだ方がおいしいよね」

「そう思うなら最初からそうしろよ!!」

「長塚の言うとおり普通に飲んだ方がいいと思った。」

「昼も食ったことだし次はどこ行く？」

「私はどこでも」

「私もです」

長塚と吉田は特にないらしい。

「和也は？」

「俺も特には…翔太は？」

「……………」

誰も意見がないと…

「よし！ 帰ろう！」

「ゲーセンに行こう！！」

「「おーっ！！」」

何でこいつらこんなに息があってるんだ？

今日会ったばかりだよな？

「ほら和也行くぞ」

「はいはい」

ん？ あの店って…

「和也君どうしたの？」

「いやあの店」

「あそこって雑貨店ですか？」

「あの店は何も売ってないらしいぞ」

「「へっ？」」

「何言ってるんだ？ ちゃんと商品あるじゃんか」

「俺も詳しいことは知らん。せっかくだし翔太ちよっど行ってこい」

「え、何で俺？」

「いいから。ほら」

「わかったわかった」

翔太が雑貨店（？）に入って行ったのを見届け、

「じゃあ行くか」

「ええ！？ 本多君は？」

「置いていくのはどうかと…」

「冗談だよ。冗談」

しばらく適当な話をしながら翔太が帰ってくるのを待った。

十分後。

翔太はびちょびちょに濡れて帰ってきた。

「…ゲーセン行くか」

「ちよい待った!? 何も聞かないのはどうかと!?!」

「はあ、何があった?」

深いため息をしながら俺は翔太に聞いてやった。

「なんでそんなめんどくさそうなんだよ」

「気にするな。で、何があった?」

「あの店に入った後適当に商品選んで買おうと店員のおばちゃんに声かけたんだ」

「ナンパか? お前が熟女好きだったとは」

「違うわ! 話聞いてりゃわかんだろ!」

「いちいちツッコむな。で?」

「これくださいって言ったら。水かけられた」

……………?

「どゆこと?」

「こつちが聞きたい。それでこれは商品じゃないんですか? って聞いたら「見たらわかるだろ!」って言われてお茶かけられた」

「お茶は爽健美茶か?」

「お、いお茶だ」

なん…だと!?!?

「ねえ今の会話必要?」

「有希ちゃん今のはきつと大きな意味があるんだよ」

「それでじゃあ何で雑貨店みたいなことしてるんですかって聞いたら「あんたに私の何がわかるんだよ!」ってオレンジジュースかけられた」

「果汁20%？」

「100%」

「そんなバカな!？」

「ねえそんなことどうでもよくない？」

「有希ちゃん私たちは黙って聞いてよ」

「んで最後に凹んで帰ろうとしたらおばちゃんが「悪かったね」ってタオルくれて「良かったらまた来てくださいな」って言われた」
翔太の話を聞いた俺が思ったこと…

「そのおばちゃんは一体何がしたかったの？」

「……」

答えは誰にもわからない。

色々あったがとりあえずは目的地のゲーセンに着いたわけだが、

「うるさい」

ゲーセンってうるさいから嫌いだ。

でも暇なときにはよく来る。

「さて何する？」

「それぞれ好きなのやればいいんじゃないか？」

「そうだな」

さて俺は何するかな。

「和也君あれ取って！」

長塚が俺の腕を取りUFOキャッチャーのところまで引っ張ってきた。
た。

「いきなり引っ張るなよ」

「これ取って！ これ！」

聞いてないし…

長塚がほしがってるのはネコのぬいぐるみ。

「正直取れるかどうかからんぞ」

そこまでうまいわけでもないし。

とりあえずチャレンジ。

まず一回目ぬいぐるみの頭を掴み成功かと思いきや失敗。
二回目胴体を掴むもすぐに落ちて失敗。
三回目もう一度頭を掴むが失敗。

.....

.....

十回目失敗。

「ふ、ふふふふ」

「か、和也君。もういいよ。お金無くなっちゃっよ」

「こいつ絶対に取ったる！」

ここまでできたら取れるまでやってやる。

数分後。

「俺の勝ちだ！」

無事ぬいぐるみをゲットすることはできたが...

「犠牲は大きかった」

何人もの野口とさよならをした。

「ご、ごめんね。私のせいで」

「別にいいよ。それ無くしたりすんなよ」

結構な額使ったんだから。

「うん！ 絶対に無くさないよ！」

この笑顔が見ただけだけでよしとしよう...何て思わないが、くよくよしてもしょうがないしな。

「ところで翔太と吉田は？」

「さあ？」

二人を探していると、

「ああ！ また負けた！」

「ふふ。本多君って弱いね」

「畜生！ 悔しい！」

二人は格闘ゲームをしていた。

しかも見た感じ翔太が何度も吉田に負けてるみたいだ。

「よし！ 翔太チエンジだ。俺がやる」

「お、やっと来たか。んじゃチエンジな吉田さん相当強いぞ」

「後で私もやりたい」

そんなこんなで結構な時間をゲーセンで過ごした。

「今日は楽しかったね」

「めっちゃくちゃ疲れた…」

今は帰宅途中。長塚とは家の方向が一緒なので一緒に帰っている。

翔太と吉田とはもう別れた。

「またこのメンバーで遊びに行くのもいいかもね」

「…そうだな」

「あれ？」

「どうかしたか？」

「いや和也君はてっきり「疲れるからもう嫌だ」とか言うかと思っ
たから」

確かに普段の俺ならそう言う気がする。

疲れすぎて頭がおかしくなってきたかな？

「まあたまにはこういうのも悪くないだろ」

「ふふ。そうだね。ならまた四人で遊びに行こっか」

「気が向いたらな」

俺はふと今日は晴れて正解だったかもな。と、そう思った

第十話「お前はつとまか！」

現在は七月。クラスの奴らもすでに夏服になっている。

ていつかまだ冬服の奴がいたらそいつはよっぽどのバカか、もしくはアホか。

…バカとアホってどう違うんだっけ？

まあそんなことはどうでもいい。

ぶつちやけ七月だとか、夏服だとかも今の俺にとってはどうでもいいことだ。

今最も重要なことは…

「はい。じゃあ順番にくじ引いてってね」
席替えだ。

ついにこの日が来た。

こんなほぼど真ん中の席とはお別れだ。

理想としてはとりあえず端っこの席がいいのだが席はくじで決まるので運次第だ。

いっそのことバトルロワイヤルでもやって生き残ったやつが全員の席を決めるとかした方が面白いと思う。

ホントにバトルロワイヤルなんかしても俺は勝ち残れない気がするが…

くじを引いた後はそのくじを担当に渡して席に戻る。

担任はそのくじに書かれている番号を見てその生徒がどこの席になるかをチェックする。

自分がどの席になるかは全員がくじを引き終わってからでないといけない。

ちなみに目が悪い生徒などは前の席の番号だけがあるくじを先に引いている。

クラス内では「どこになるかな？」とか「近くだといいね」とか話している奴らばかりだ。

俺としては誰が近くでもいいのでとにかくこの席以外がいい。とりあえず同じ席にならないことを祈っとく。

「全員引いたよね？　じゃあこのプリントを黒板に貼るからこれ見て自分の席を確認して移動して」

担任は席順の書かれたプリントを黒板に貼り付けた。

すると黒板にクラスメートたちが自分の席を確認しようと集まる。

一斉に行くもんだから少し混雑している。

俺は少し人が減ってから見に行こうとその様子を見ていた。

「宮野ここ俺の席なんだけど」

どうやらこの席ともお別れのようだ。

長いようで短い期間だった。

今までは真ん中で嫌だ嫌だと言っていたが今にして思うと…

「宮野聞いてる？」

「…今退く」

ふむ、追い出されてしまった。

せっかく人が元自分の席とお別れをしていたというのに。

まあ別にいいんだけど。

しょうがないからそろそろ俺も席を確認しに行くか。

そうして俺は黒板に向かって歩き出したのだった！

とか言っても数歩で着いたけどな。

さてと俺の席はどこだ。

廊下側の席から順に探していく。

一列目はない。二列目も。三、四…

最後は窓側の席なわけだが…見つけた！

俺の席は窓側の一番後ろ。

よっしゃ！　キタコレ！

思わずガッツポーズしそうになるくらい嬉しい。

やばいめっちゃラッキー！

「あ、後ろの席和也君なんだ」

「へ？」

声が出た方を向くとそこには、

「あ！ それに私の斜め後ろは真理ちゃんだ。ラッキーだな〜」
めっちゃいい笑顔の長塚がいた。

前言撤回。アンラッキーだわ…

前には長塚。横には吉田。

マジでか…

誰が近くでもいいとか言っただけどごめんなさい。あれ嘘です。

これなら前の席の方が…いやでも真ん中に比べればこっちの方が…
何かもうどうでもいいや。

くじで決まっただし諦めよう。

「和也君どうかしたの？」

「いやなんでもない。てか前向け」

今授業中なんだが…

別に長塚のことを嫌っているわけではない。

ただ長塚といると疲れるんだよな。

なんかボケたりするから思わずツッコんじゃうし…

「寂しくなったら声掛けていいからね」

「寂しくなんかならないから。仮になつたとしても長塚に声かけた
りしないから。後前向けって」

「少しでも寂しいと思っただらすぐに声掛けるんだよ。我慢して死ん
じゃだめだよ」

「俺はうさぎか！」

こつこつ風に。

「宮野お前はうさぎなのか？」

「あ、いえ。なんでもありません」

「授業中は静かにな」

「あ、はい」

周りはクスクスと笑っている。

畜生長塚め…

「長塚お前授業中に話しかけてくるな」
授業が終わり俺は長塚に注意することにした。
「え〜いいじゃん。みんな笑ってくれたし」
「俺がただ笑われただけだよ」
「宮野君ナイスツツコミでしたよ」
「吉田お前もか…」
やっぱり前の席の方がよかったな…
「とにかく長塚。授業中に俺に話しかけるなよ」
「寂しくなったら…」
「そのネタはもういい！」

今は国語の時間だ。もちろん教師は我らが敵田中だ。
もう俺の中では田中は教師ではなく敵として認識されている。

「和也君和也君」
「お前休み時間の聞いてた？」
「聞き流してた」
「ながつ！ すなよ…」
思わずまたでかい声を出しそうになった。
「チツ！ 惜しい」
「わざとか！ わざとだな!？」
「宮野何がわざとなんだ？」
「あ、え〜と…なんでもないです」
またやってしまった。
「和也君ごめんごめん」
「謝るくらいなら話しかけるな」
「でも私寂しいと死んじゃう体質で」
「お前はうさぎか！」

……
「あ〜宮野？」

もうやだ。穴があつたら入りたい…！っそのことグラウンドに穴掘つて入ろうかな。

「宮野？ その、なんだ。誰がうさぎなんだ？」

「あ、その、えっと」

ああもう！ どうにでもなれ！！

「先生がうさぎじゃないかなって！」

こうなつたらここで決着をつけてやる。

我が宿敵田中よ！

「お、俺がか？」

「ええ！ そりゃもう！ ぱつちりと！ パーフェクトに！！」

やばい。もう自分が何言ってるのかさえ分かんなくなってきた。

「なんで俺がうさぎ？」

「何か先生って人参好きそうな顔してるんで！！」

その瞬間クラスの空気が凍った気がした。

…何言ってるんだろ俺。

少し冷静にはなったけどもうどうしようもないなこれ。

「俺って人参が好きそうな顔してるのか？」

「え、ええ。まあ」

どうしよう。俺一体どうすれば…

「確かに人参が好きだな」

「…え？」

マジで？

クラスの奴らもみんなホントに？って顔してるし

「俺の大好物だ。人参は良い！ もしかして宮野も人参が好きなの

か？」

「え！？ えっと、はい」

この空気の中「俺は別に」とか言えるわけがない。

少なくとも俺は言えない。

「そうかそうか！ 人参は良い食べ物だ！」

この教師授業中に人参について語り始めたぞ！？

クラスを見回すと全員が「何とかしろ」と目で訴えかけてきてる。

「せ、先生。今は授業を……」

「ん？ ああ、そうだな。じゃあ宮野。昼休み職員室にこい」
まあ叱られるわな。

「人参について語ろうじゃないか」

…え？

昼休みは散々だった。

大して好きでもない人参のことを永遠と、しかも一方的に語られた。

田中の人参トークを聞きながら飯を食べる。

はつきり言って説教された方がましだった。

田中めやつてくれる。

今回は俺の負けだが次は勝つ！

「はあ〜」

とにかく今日はひどい目にあった。

もう疲れた。

おやすみパトラッシュ。

「か、和也君」

俺は眠ることさえできないのか！？

「ごめんね。私のせいで」

いつになくしょんぼりとしている長塚。

今回のことはさすがに反省したらしい。

「別にいい。でも、できたらあまりこういうことはするな。」

こう簡単に許してしまう俺は甘いのだろうか？

「許してくれるの？」

「別に怒ってないしな」

というか起こる気力さえ今の俺にはない。

…そういえば今まで長塚のこと本気で怒ったことないな。

長塚に振り回されて疲れるとか面倒なとかなら思ったりするけど、

ムカついたりしたことはないよな。

「和也君は優しいね」

「んなことないだろ」

「ううん。私は和也君とっても優しいと思うよ」

「そうかい」

こういうこと言われるとなんか恥かしいな。

俺は照れくさくて窓の外を見ながら返事をした。

「ところで田中先生との人参トークはどうだった？」

「最悪だった」

「田中先生との絆は？」

「より悪くなった」

「あ！ UFOー!!」

「え？ マジで？」

俺は急いで窓を見て「ってベタな嘘つくな!!」と言おうとしてやめた。

なんだか声を出すのもめんどくさくなってきた。

…あ、あの雲ドーナツみたい。あははは

「ま、真理ちゃん！ どうしよう、和也君おかしくなっちゃった！」

「落ち着いて、有希ちゃん。宮野君はただ空を見てるだけだよ」

「違うよ！ いつもならあそこで「ってベタな嘘つくな!!」みた

いなツツコミが来るのに…」

「よくそんなことわかるね…」

「長年の勘だよ！」

……………

「誰かツツコんでよ!？」

長塚が一人でアホなことをしている。

残念ながら今の俺にはツツコむ気力もない。

「うーどうしよう。和也君が本気でUFOのこと探しちゃってるよ」

「UFOなんて探してないわ…」

「うわーん！ やっとツツコミしたと思ったらいつものキレがない

よー!!」

長塚は一体俺に何を求めてるんだ…

もう本気と書いてマジで疲れた。

早く家に帰って心身ともに休めたい…

第十一話「全力で遠慮する」

席替えをした翌日の朝。

いつも通り長塚と話をしていたのだが、

「これからは休み時間もお話してできるね」

なんて長塚が言ってきた。

何となくそんなこと言いそうな気はしてたけど。

「全力で遠慮する」

「え、何で？」

「これ以上俺の時間を奪われてたまるか」

最近、学校で俺が一人である時間が長塚に奪われつつある。

今だって当たり前のように話しているが長塚が転校してくるまではいつも一人でラノベを読んでいたのだ。昼休みだって一人で屋上で飯を食ってたのに、長塚にそのことがばれたせいで時々だが一緒に昼飯と食うことになった。

さらに休み時間までとなったらもう学校ではほとんど長塚と一緒にいることになる。

別にどうしても一人でいたいとは言わないがずっと長塚と一緒にだと体力が持たなくなる。

それに休み時間のたびに長塚と喋ってたらラノベを読む時間がマジでなくなる。

「せつかく席が近いんだからいいじゃん」

「よくない」

「む。何さ、和也君のケチ」

「ケチでもなんでもいい」

そんなことを話していると、

ガラッ

「あ、真理ちゃんおはよう」

これまたいつも通り吉田がやってきた。

「おはよう。宮野君もおはようございます」

「ん。ああ、おはよ」

吉田が俺の隣に座ってきた。

そっぴいえば吉田は俺の隣だったな。

「真理ちゃん聞いてよ。和也君酷いんだよ」

長塚が吉田と話し始めたので、ようやく俺が解放される。

これでもうやくラノベが読める。

そう思つて俺はカバンからラノベを取り出そうと…

「宮野君。休み時間に有希ちゃんと話しするくらい良いじゃないですか」

何故かこつちに話を振ってきた。

しかも長塚の味方をして。

「ほら真理ちゃんだつてこう言つてるよ」

「いや、でもさあ。大体俺が長塚と話ししてたら吉田の話し相手がいなくなるぞ」

とりあえずこの状況はまずい。

このままだと休み時間まで長塚に奪われることになる。

「失礼なこと言わないでください。宮野君と違って有希ちゃん以外にも話し相手くらいいます」

なんか今吉田に酷いこと言われなかった？

「それに前に言いましたよね私？」

「…何を？」

「私二人のやり取り見るの好きなんでつて」

この時の吉田はものすごいドヤ顔をしていて少しイラつときた。

それにしても俺の中で吉田のイメージがどんどん崩れていく。

今までも何度か「吉田つてこんなキャラだっけ？」と思つたことが何回かあったが、どうやら俺は今まで勘違いをしていたようだ。

それにしても俺に味方はいないのか？

「それに宮野君。休み時間は本読んでるだけじゃないですか」

「だから長塚と話しなんかしてたら読む時間無くなるだろ」

「家で読めばいいじゃないですか」

くっ、正論言いやがって。

「和也君。いい加減諦めたら？」

俺の肩をポンポンと叩きながら長塚が自愛に満ちた表情を浮かべて言ってきた。

こいつ絶対にケンカ売ってるだろ。

「俺とは朝に話してんだから休み時間ぐらい他の奴と話してろ」

「たまに、たまにでいいからさ。お願い」

たまにならいい…のか？

…まあいいか

「たまにならな」

「ホントに？ やったー！」

これでよかつたのか？

なんかもうよくわかんなくなってきた。

「宮野君って案外ちよろいですよね…」

「ん？ 吉田なんか言ったか？」

「いえ、何も」

気のせいか…

一時間目が終わり最初の休み時間。

「か〜ず〜や〜君」

さっそく長塚が俺に話しかけてきた。

「お前たまにって言っただろ」

「まだ一回目だよ」

確かに長塚の言う通りなのだが、

「朝に話したばっかなんだから今話しかけなくてもいいだろ」

「まあまあ気にしない、気にしない。それよりさっきの授業どうだった？」

「どつだつたつて?」

「ここがよくわからなかったから教えて! みたいな」

「特に問題ない」

さっきの授業は理科だった。教科担当の名前は天野。性別は男。最近の悩みは抜け毛が気になるとか。授業中に「どうしよう」とか「あつ、また毛が」とかぶつぶつ言っていた。

「えゝなんかないの? 何でも教えてあげるよ。なんだったら私のこと先生とか呼んでくれても…」

「そんなことよりも授業中に暇さえあれば後ろ向くのやめてくれるか?」

長塚は授業中にこっちを向いては話しかけてきたり、ノートに書いた落書きを見せてきたりしてきた。

「ダメなの?」

「ダメに決まってるんだろ。昨日のこと忘れたとは言わせんぞ」

昨日は長塚がボケるもんだからついでかい声を出してしまい酷い目にあつた。…本当に酷い目にあつた。

「あ、あれは私も反省してるよ」

「本当か?」

「ホントだよ。だから今日は変なことは言わずただ話しかけただけでしょ」

確かにボケたりはしてこなかった。

「私だつてちゃんと学習はするよ。だから安心して」

まあ昨日に比べたらまだマシな方かもな。…多分。

現在昼休み。

もちろん俺は屋上にいる。

ちなみに今日は長塚も一緒だ。

少なくとも週に一回は必ず一緒に飯を食っている。

まあ長塚の弁当は美味しいしそれを食べるから別にいいかなって思っている。

今はそんなことよりも、

「なあ長塚……」

「どうしたの？」

「なんか今のところ全部の休み時間長塚と話してた気がするんだけど」

「気がするんじゃないかって、その通りだよ」

「そうか……気のせいじゃないんだな。」

「んで、どういうことだ」

「なにが？」

「朝の会話覚えてるか？」

「もちろん！ 休み時間も一緒にお話ししようねって話したよね」

長塚の奴自分の都合のいいところしか覚えてないじゃん。

「たまにって言ったる。なのに今のところ全部の休み時間お前と過

ごしてるよ。っていうか今日は一日中長塚と一緒にいる気がするぞ」

「そうだね。今日は一日中和也君と一緒にいる気がするよ」

「はあ、俺がバカだった。」

「こんなことなら朝に「たまにならな」なんて言わなきゃよかった。」

「でも楽しいなあ。和也君とこんなに居られて」

「俺も俺で甘いよな。」

長塚が俺に話しかけてきた時なんだかんだって結局は一緒に喋っちゃってるもんなあ。

ああいうときに長塚を無視とかすればいいんだろうけど、できないんだよな。

「なあ長塚」

「ん？ ふあに？」

「……とりあえず食べ物を飲み込んでから返事をしてくれ」

長塚は食べ物飲み込み、お茶を飲んでから

「フカーッ!!」

何故か威嚇してきた。

「お前に何があった!?!」

変なものでも食ったか?

「人が物食べてる時に声かけるのはマナーがなってないと思うよ」

「それは俺が悪かった。でもだからって口に食べ物含んだまま返事する長塚の方がマナーがなってないと思うんだが」

「ふっ、言うようになったじゃないか坊主」

「俺ら同い年だよな?」

マジで変なもの食ったんじゃないだろうな?

「それでどうかしたの?」

「ああ、そうだった。長塚のおかげで俺は一つ賢くなったよ」

「?」

「長塚と喋ってて思ったんだよ。人間諦めが肝心だなと」

だから俺は諦めることにした。

長塚を無視できないんじゃない。朝に休み時間、昼休み。いつの間にか俺の一人でいる時間が長塚という時間になりつつあるが諦めよう。

俺は長塚には勝てない。

もうどうにでもなってしまう。

「和也君。明日もここに来ていい?」

「は? 今日来たんだから明日は来る必要ないだろ」

「お願いだよ」

「却下」

「じゃーんけーんぼん!!」

「へ? えつと」

長塚がいきなりじゃんけんをしてきたので俺は慌ててグーを、長塚はパーを出した。

「あ、あれなに?」

「ん？」

今度は長塚が上に指を差すので上を見たのだが、

「何もなくて？」

「私の勝ちね」

「えっと…何の話？」

何かもうわけがわからなくなってきた。

「長塚は何がしたいんだ？」

「あっちむいてほいだよ」

「……………」

「で、私が勝ったから明日もまたここ来るね」

ああ、なるほど…って！

「それずるいだろ！」

「へへっ、もう遅いよー」

ていうか普通にじゃんけんだけでよかったんじゃないのか？

どうせ俺負けてたし…

「じゃあ私はもう教室戻るね」

「あ、おい！」

「大丈夫大丈夫。ちゃんと和也君のお弁当も作ってくるから」

別に弁当のことを言いたいわけではないんだけど。

「じゃあねー」

長塚は颯爽と屋上から去って行ってしまった。

うん、まああれだ。諦めよう。

第十二話「見つからない」

今日は珍しく朝早くに起きた。

とは言ってもどうせ今日は休日で学校は休みなので二度寝をしようとしたのだが、何故だか目が覚めてしまい寝付けないので起きることにした。

こんな時間に起きるのも珍しかったのでせっかくだし朝の散歩をすることにした。

何か面白いことでもないかと思いつながら散歩をした結果、

「ワンっ！」

見知らぬ犬になつかれた。

「どうしてこうなった…」

一体どうしてこんなことに…

俺はただ散歩をしていただけなんだが。

犬はさつきから俺の周りをぐるぐると回っている。

「ん？ ちょっとこっち来い」

俺が犬を呼ぶとちゃんとこっちに寄ってきた。

結構賢いなこの犬。

よく見てみるとこいつは首輪をしている。

「お前飼い犬だろ」

「ワンっ！」

こいつちゃんと返事までしてくれるぞ。

とりあえずこいつは飼い犬らしい。そうになると、

「飼い主はどこだ？」

どっかに飼い主がいるはずなんだが…

てかこいつは何で一人…いや一匹なんだ？

迷子か？ それとも飼い主から逃げてきたとか？

「おい。お前の飼い主はどこだ？」

「クウ〜ン？」

どうやらわからないらしい。

俺の言葉が通じてないだけとも思えるが、俺はこいつにちゃんと言葉が通じてると思ってる。

せっかくだし少し試してみよう。

「お前名前は？」

「ワンっ！」

「どこから来た？」

「ワンっ！」

「飼い主の名前は？」

「ワンっ！」

「好きな食べ物は何？」

「ワンっ！」

なんて言ってるのかわからないっ！

俺の問いにちゃんと答えてくれてるんだけど全部「ワンっ！」としか聞こえない…

結論。俺の言葉は通じてると思われるが、俺にこの犬の言葉は通じない。

しかしこの犬どうしよう。

…ここで会ったのも何かの縁ってことで、

「お前の飼い主一緒に探すか」

「ワンっ！」

散歩ついで飼い主探しでもしますか。

それから結構歩いたんだが、

「…見つからない」

どこにいるんだこいつの飼い主は。

…まさかこの犬じゃなくて飼い主が迷子になっているのか！？

まあどっちが迷子でもあんまり関係はないな。

「なあ。お前の鼻使って飼い主を探し出すこととかできないの？」
なんてちよっとした無茶ぶりを犬にしてみたら、

「ワンっ!?!」

なんか驚いたように吠え、周りの匂いを嗅ぎ始め、

「ワンっ!」

犬は俺の方を向き「俺についてこい」とでも言いたげに吠えて走って行った。

「あ、おい!」

ここまで来て放っておくなんてできないので俺は犬を見失わないように追いかけた。

それからは大変だった。

あの犬思ってた以上に走るのが速くて追いかけるのが大変だったのだか、さらには人一人通れるかわからないほど狭い道を走ったり、塀の上を走ったり、屋根の上を走ったり、下水道を走ったり…途中何度も「なんでこんなところ走ってんだー!!」と叫んだりもした。

声を出すのもきつくなり始めると「ペロー!」と言う声が聞こえた。その声に俺の前を走っていた犬が「ワンっ!」と嬉しそうな声を出した。

やっと見つけたか…

なんて思っていると犬が走るペースを上げ始めた。

ふっふっふ、面白い。こうなったらこいつを抜いてやる!

俺もペースを上げ、全力で走った。

「ぬわっ!」

走って…転けた。

カンカンカン! と頭の中でリングの鐘が鳴った。

俺の負けだ…

「ペロっ!?!」

「ワンっ!」

俺の倒れてるすぐそこでは飼い犬とその飼い主が感動の再開を果たしていた。

「もう。どこ行ってたの? 散歩の途中にいきなりいなくなったり

して、心配したんだから」

「ワンっ！」

「え？ そこに倒れてる人と一緒に私を探してた？」

「ワンっ！」

なんか今飼い主さん。犬と会話してなかった？

「って！ 大丈夫ですか!？」

どうやら飼い主さんはやっと倒れてる俺に気付いたようだ。

「え、ええ。大丈夫です。問題ありません」

正直なところ大丈夫ではない。

色々なところを走らされ、最終的にもものすごい勢いで転けたのだから体中が痛い。

「そんな今にも死んでしまいそうな目で言われても…」

心配してくれる飼い主さん。見た感じ俺の母さんと歳が近そうな女性。

母さんの歳は知らないけどおそらく同じ年くらいだと思います。

「クウーン」

犬も心配そうに俺の頬を舐めている。

心配してくれるのは嬉しい。でもこいつがあんな変な道を通らなければ今よりは軽く済んだと思う。

「あら？ ペロがうちの家族以外に懐くなんて珍しい…」

「そうなんですか？」

「ええ。誰かに懐くなんて滅多にないんです」

でもこいつが付いた時には俺の周りをうるちよろしてたぞ…

「この犬の名前ペロって言うんですか？」

もしかしたらペペロンチーノ略してペロとかだったり…ないな。

「ええ。うちの大事な家族です」

飼い主さんはペロを抱き上げ、優しい眼差しをしてそう言った。

「ところで体は本当に大丈夫なんですか？」

実は立てない位に酷かったり…」

「いえ、ホントに問題ないですよ」

身体中痛い。家に帰るくらいはできる。

「じゃあ足を怪我されてるとか」

「それもあります」

何故この人はそこまで俺に聞いてくるんだ？

「本当にどこにも問題はないんですか？」

「はい。ホントに大丈夫なんですけど…」

「あの、でしたら何で立たずに倒れたままなんですか？」

「…え？」

言われて気が付いた。

俺はまだ道に倒れたまま飼い主さんと喋っていた。

端から見たら俺って相当変な人に見えるんじゃないだろうか…

「す、すみません！ 今立ちます！」

このままじゃ本当に変な人だと思った俺は急いで立ち上がった。

まだ大丈夫。まだ変な人にはなっていない…はず。

「ふふつ。変な人」

…手遅れでした。

「とにかくペロはもう大丈夫そうなんで俺はもう行きますね」

これ以上変な人だと思われたくないのだから俺は早くこの場から立ち去ろうと思ったのだが、

「あ、待ってください」

飼い主さんに呼び止められた。

「はい？」

「ペロが迷惑をかけたのでお礼…を？」

「お礼とかは別に…どうかしました？」

飼い主さんが俺を見て固まってしまった。

どうしたんだ？

「あの…怪我とか本当の本当に大丈夫なんですか？ 我慢とかし

てないですか？」

「本当の本当に問題ないですよ」

少し我慢してるけど…

「で、でも」

飼い主さんは俺を見てとても心配そうにしている。

別に俺そこまで酷い怪我したりはしてないんだけどな…

なんて思いながら自分の体を見てみると、

「うわ…」

マジで驚いた。服がすごいボロボロになっている。

少しだけど所々血も出てるし。

けど何でこんなことになってるんだ？

さっき転けたから血が出るのはわかるんだが、転けただけで服が

ここまでボロボロになるはずがない。となると、

「ワンっ！」

俺は飼い主さんに抱かれているペロを見た。

こいつを追いかけているんなところを走ったからな…

「もしかしてペロがなにか…」

「い、いえ。そんなことは…」

…ないとは言い切れない。

もう少しまともな道を走ってくればこんな風にはなっていないかつ

たはず。

「と、とにかく大丈夫ですから」

「だめです！ 私の家がすぐ近くですのでお礼とお詫びをさせて下

さい」

「で、でも…」

「お願いします。このままじゃ申し訳なくて」

「わかりました」

ここまで言われて断ることは俺には出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2726x/>

孤独な俺と無邪気な君と

2012年1月2日07時45分発行